

福岡市

有田・小田部

第3集

—原西保育所の調査(遺構編)—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第84集

1982

福岡市教育委員会

有田・小田部

<福岡市西区有田、小田部における遺跡群の発掘調査報告>

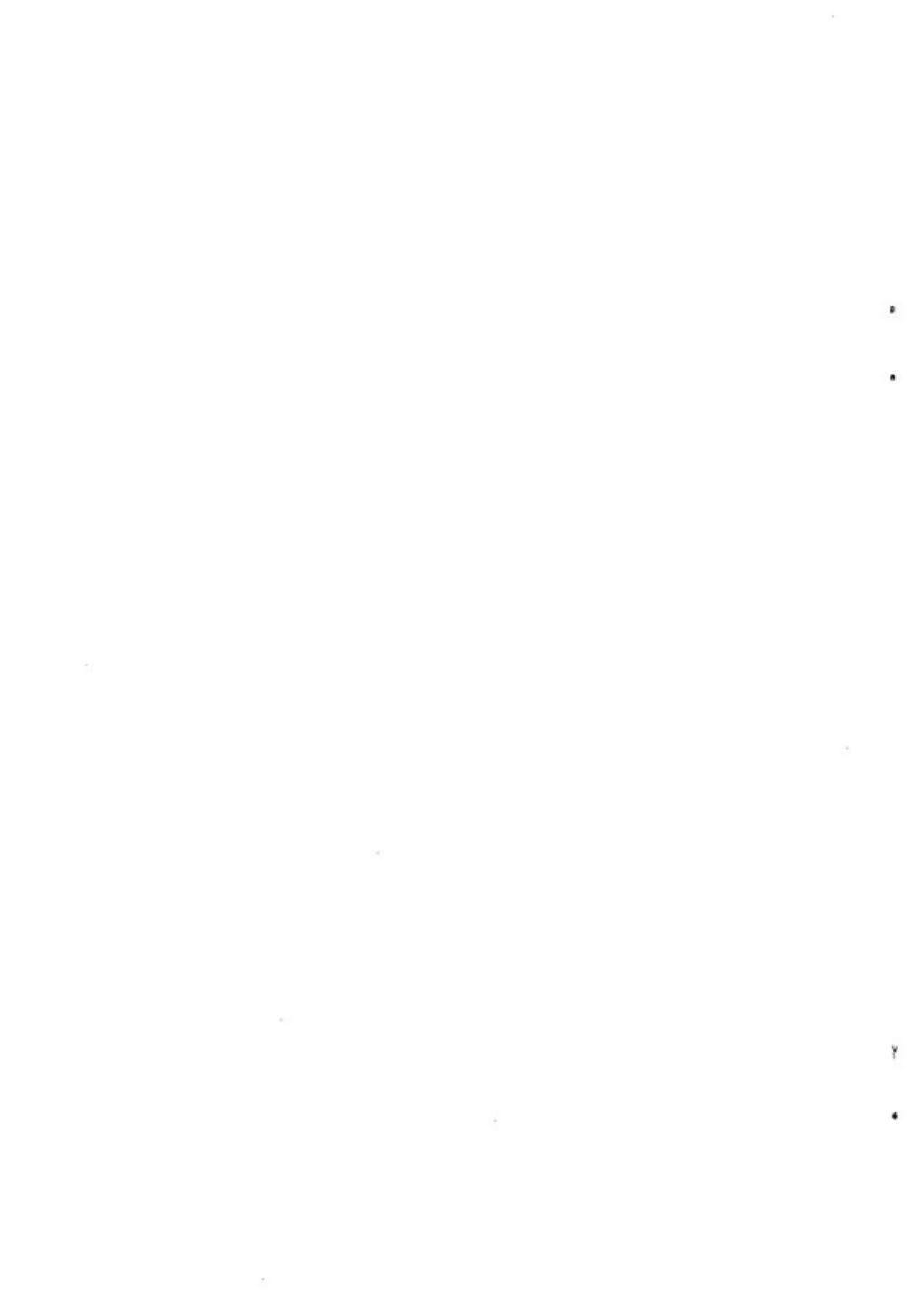
第 3 集

—原西保育所の調査(遺構編)一



昭和 57 年 3 月

福岡市教育委員会



序 文

福岡市西部の有田・小田部地区は『有田遺跡群』として、豊富な遺跡があるところとして知られています。

その中に保育所の建設が計画されたことから、福岡市教育委員会が昭和56年度に発掘調査を実施したところ。弥生時代から中世におよぶ造構が確認されるなどの成果が得られました。

その成果をまとめた本書が、広く市民の皆さまにご活用いただき、文化財保護の一助となれば幸いです。

発掘調査から資料整理まで多くの人々のご協力をいただいたことに、心から敬意を表します。

昭和 57 年 3 月 31 日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

例　　言

- (1) 本書は、福岡市西区有田・小田部地域内における原西保育所の建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が、昭和56年10月6日～11月21日迄実施した発掘調査報告書である。
- (2) 本書では、原西保育所の遺構編について報告する。
- (3) 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 本書掲載のFig.4「有田地区調査地域図」は第1、2次調査報告の「遺構概要図」及び「福岡市文化財分布地図－西部I」をもとに作製した。
- (5) 発掘調査は井沢洋一、杉山富雄、高倉浩一が担当した。
- (6) 本書の遺構写真は井沢・杉山が撮影した。
- (7) 本書掲載の遺構の整図は杉山、松尾正直、原秋代、平井彩子が担当した。
- (8) 本書の執筆は、井沢が第I章～第II章を、第III章を井沢、山崎龍雄、杉山が担当した。編集は井沢、山崎、杉山の協議によって行なった。

本 文 目 次

	本文頁
第I章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織.....	1
第II章 遺跡の立地と調査概要.....	3
第III章 調査経過.....	4
1. 第59次調査.....	4
検出遺構.....	4
小 結.....	40

挿 図 目 次

	本文頁
Fig. 1 有田・小田部周辺の弥生時代遺跡(1/25000)	2
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点(1/5000).....	折り込み
Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図.....(1/5000).....	折り込み
Fig. 4 有田地区調査地域図.....(1/2500).....	折り込み

本文頁

Fig. 5 第59次調査地点周辺図.....	(1/600)	4
Fig. 6 遺構配置図.....	(1/200)	5
Fig. 7 発掘区南壁土層図.....	(1/40)	6
Fig. 8 住居跡SI 01, 02復元図.....	(1/150)	7
Fig. 9 住居跡SI 01, 02.....	(1/60)	折り込み
Fig. 10 柱穴群SI 03.....	(1/60)	8
Fig. 11 瓦棺墓.....	(1/30)	9
Fig. 12 土 坂SK 01, 02.....	(1/30)	11
Fig. 13 土 坂SK 03, 05.....	(1/30)	13
Fig. 14 土 坂SK 04.....	(1/30)	14
Fig. 15 土 坂SK 06, 07.....	(1/30)	15
Fig. 16 土 坂SK 08.....	(1/30)	16
Fig. 17 土 坂SK 09, 37.....	(1/30)	18
Fig. 18 土 坂SK 10, 11.....	(1/30)	19
Fig. 19 土 坂SK 13, 14, 15.....	(1/30)	20
Fig. 20 土 坂SK 16, 19.....	(1/30, 1/60)	21
Fig. 21 土 坂SK 20.....	(1/30)	22
Fig. 22 土 坂SK 21, 22, 23.....	(1/30)	23
Fig. 23 土 坂SK 25, 26.....	(1/30)	25
Fig. 24 土 坂SK 27, 28.....	(1/30)	26
Fig. 25 土 坂SK 29, 30.....	(1/30)	27
Fig. 26 土 坂SK 31.....	(1/30)	28
Fig. 27 土 坂SK 33, 34, 35.....	(1/30, 1/60)	29
Fig. 28 土 坂SK 39, 40.....	(1/30, 1/60)	30
Fig. 29 土 坂SK 41.....	(1/60)	折り込み
Fig. 30 溝SD 01.....	(1/60)	折り込み
Fig. 31 溝SD 02.....	(1/60)	折り込み
Fig. 32 溝SD 03, 04.....	(1/60)	33
Fig. 33 掘立柱建物SB 01, 02.....	(1/100)	35
Fig. 34 掘立柱建物SB 03, 04.....	(1/100)	36
Fig. 35 掘立柱建物SB 05, 06.....	(1/100)	37
Fig. 36 掘立柱建物SB 07, 08.....	(1/100)	38
Fig. 37 掘立柱建物SB 09, 10.....	(1/100)	39

Fig. 38 中世造構配置図 (1/200) 41

表 目 次

表1. 土地観察表 43

図 版 目 次

- PL. 1 有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）
 PL. 2 有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）
 PL. 3 (1)遺跡全景（南から） (2)調査区北半部分（南から）
 PL. 4 (1)調査区南半部分（西から） (2)調査区南半東部分
 PL. 5 (1)住居跡 SI 01, 02 (2)柱穴集中部
 PL. 6 (1)妻棺墓 (2) 同 拡大
 PL. 7 (1)土塙集中部 (2)土塙 SK 01
 PL. 8 (1)土塙 SK 02 (2) 同 土器出土状態
 PL. 9 (1)土塙 SK 03 (2) 同 04
 PL. 10 (1)土塙 SK 05 (2) 同 06
 PL. 11 (1)土塙 SK 07 (2) 同 08
 PL. 12 (1)土塙 SK 11 (2) 同 四耳壺出土状態
 PL. 13 (1)土塙 SK 13 (2) 同 14
 PL. 14 (1)土塙 SK 15 (2) 同 16
 PL. 15 (1)土塙 SK 19 (2) 同 20
 PL. 16 (1)妻棺墓, 土塙 SK 25, 26遠景 (2)土塙 SK 25
 PL. 17 (1)土塙 SK 26部分 (2) 同
 PL. 18 (1)土塙 SK 27 (2) 同 28
 PL. 19 (1)土塙 SK 29 (2) 同 30
 PL. 20 (1)土塙 SK 31 (2) 同 33
 PL. 21 (1)土塙 SK 34 (2) 同 35
 PL. 22 (1)土塙 SK 09, 37 (2) 同 41
 PL. 23 土塙 SK 41 遺物出土状態
 PL. 24 (1)土塙 SK 39 (2) 同 01土層 (3) 同 02土層

- P L.25 (1)土塙SK 03土層 (2) 同 04土層 (3) 同 05土層 (4) 同 08土層
(5) 同 19 土層
- P L.26 (1)土塙SK 33(南壁) (2)土塙SK 41南北土層(東から) (3) 同 東西土層(南から)
- P L.27 (1)溝SD 01 (2) 同 潜り
- P L.28 (1)溝SD 01の西壁土層 (2) 同 潜りの土層(東より) (3) 同 中央部の土層(東より)
- P L.29 (1)溝SD 02の南部分(潜りSX 01,02) (2) 同 南部分(潜りSX 01)
- P L.30 (1)溝SD 02東部分 (2) 同 東部分土層(北より) (3) 同 西端
- P L.31 (1)溝SD 02(潜りSX 02) (2) 同 (潜りSX 03)
- P L.32 (1)溝SD 02西端遺物出土状態 (2) 同 潜りSX 02遺物出土状態
(3) 同 SX 02遺物出土状態 (4) 同 遺物出土状態
- P L.33 (1)溝SD 03 (2) 同 04
- P L.34 (1)段落ちSD 05(北東隅部) (2) 同 (東辺部)
- P L.35 (1)第60次調査地点 (2) 同 溝SD 01と段落ちSD 05

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市を西へ8kmの地点に在る有田、小田部の台地は、昭和41年～昭和43年の九州大学考古学研究室による発掘調査によって、縄文時代から中世に至る遺跡の豊庫であることが判明した。しかし、福岡市の市街化が西へ伸長するに伴ない、この台地も例外なく開発による著しい変貌をとげ、埋蔵する文化財の消滅は著しいものであった。有田遺跡と総称されるこの遺跡は、福岡市教育委員会によって、昭和50年より記録保存が続けられている。発掘調査は、個人の専用住宅、共同住宅などの小規模な開発を対象としたものであるが、ここ数年の開発の伸びは著しく増加しており、昭和52年1月以来の小規模開発に伴った記録保存のため発掘調査件数、対象件数、対象面積は急速に増加している。或いは、対象面積の伸びも著しいものがある。

今回、当該地域内に於いて民生局保育課による原西保育所の建設計画があり、このため昭和56年7月に計画用地内の埋蔵文化財の試掘調査を行なった結果、弥生時代から中世に至る遺構を検出した。試掘調査結果を踏まえて保育所の造成、建築を担当する福岡市土地公社との間に受託契約を結び、発掘調査を実施した。発掘調査は昭和56年10月6日～11月21日迄実施した。対象地は以下の通りである。

対象地番 福岡市西区小田部3丁目117番地

対象面積 938m²

2. 発掘調査の組織

調査依託者 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財2係

発掘担当 井沢洋一、杉山富雄

調査補助員 高倉浩一

調査協力者 <調査に際して> 窪田寿雄（民生局婦人兒童課）、山崎龍雄（教育委員会文化課）、真子康次郎、牛尾準一、高浜謙一、松尾和雄、岩城庄助、結城茂巳、末松信子、末松泉、延綱千江子、高田綾、堀川ヒロ子、茂見秀子、中村千里、松井フユ子、坂口フミ子、佐藤テル子、金子由理子、清原ユリ子、松尾玲子、柴田幸子、土堀崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チカ、尾園佳枝、渡辺武子、西尾たつよ

<資料整理に際して> 松尾正直、原秋代、平井彩子、内尾トミ子、青柳米子、仲前智江子。



1. 西新町遺跡
2. 嶺崎遺跡
3. 尾小内遺跡
4. 原坂僕遺跡
5. 熊倉遺跡
6. 板合原遺跡
7. 千隈遺跡
8. 錦町遺跡

Fig. 1 有田周辺の弥生時代遺跡 (1 / 25,000)

第II章 遺跡の立地と概要

立 地 福岡市西区有田・小田部の位置する台地は室見川の開析によって形成された早良平野のほぼ真中に位置し、長軸を南北方向に向けた標高15m前後を示す独立中位段丘である。台地の形成は、洪積世に位置づけられ、鳥栖・新期ロームの層位をなしている。旧地形は有田1～2丁目を最高所にして標高約16mを測り、周辺の水田面との比高差は10m前後を測る。現在、区画整理のため有田地区の最高所は14.5m前後を測り、周辺の水田面との比高差7m未満である。この有田地区の最高は、平坦な地形を形成するが、北方向、或いは北西方向からの谷の深い開析によって、北へ細く伸びる舌状台地を形成する。この台地平坦部から北西方向へ伸びる舌状台地は、幅約200m、長さ約400mを測り、標高は基部で14m、先端部は8mの比高差6mを測る。今回の発掘調査地は、この台地の先端部標高10m前後を測る位置にある。現況は畑地である。周辺の調査例は、南側に第5次調査が、北側に第14次調査が実施されているので、縄文時代～近世の遺構の存在が考えられた。しかし、当該地は、南側の市営住宅地との間に、約1.5mを測る段差がある。そのため、当初、畑作のため早くから地下げを受けたものと考えられていた。試掘調査の結果、申請地の全域に遺構が検出されたこと、又、昭和40年代の初めの区画整理事業が当該地には及ぼされていないことなど、この段差が人為的でなく、段丘形成によった可能性も充分に考えられる。

概 要 試掘調査は昭和56年7月1日に実施した。申請地内に南北方向で、幅1.5mのトレンチを3本設定し、遺跡の有無、及び、土層の状態を確認した。表土は耕作土で、約20～30cmを測る。台地は東側に傾斜しており、この部分での表土は50cmを測る。遺構面はローム層、ロームの風化土、褐色砂質土から形成されている。検出した溝の壁面での観察によれば、下層に八女粘土、次に砂質土、上層にローム層、もしくはロームの風化土を乗せており、東方向へ傾斜している。又、東側ではローム層の堆積は深く、他の層は認められないことから、これらの層は、互層をなし、谷の傾斜に沿って堆積し、斜面下位においてより厚いことが考えられる。言いかえれば、台地の高い部分が削平を受けたため、西側に於いてはローム層下の褐色砂質土が露出したものと考えられる。遺構は対象地の全域に検出されるが、東側に比べ、西南部の遺構の残存状態は悪い。又、申請地の東、北側は比高差50～60cmを測る段落ちになっているが、これは、開墾時に形成されたもので、この部分の調査では、畑地地割の浅い溝が検出された。下層から、古伊万里を検出しておらず、開墾が17C後～18Cに行なわれたことを示している。台地上の遺構は、弥生時代前期～中世迄の土塙41、弥生時代前期窓棺墓1基、同中期円形住居跡2軒、中世溝状遺構4、獨立柱建物10棟を検出した。又、遺物は縄文時代晩期の変形土器片から18C代の古伊万里の陶磁器迄、多種多様な遺物を検出したが、古墳時代～平安時代の遺物は極端に少なく、遺構も検出されなかった。その他、炭化米も弥生時代～中世の土塙から検出されている。

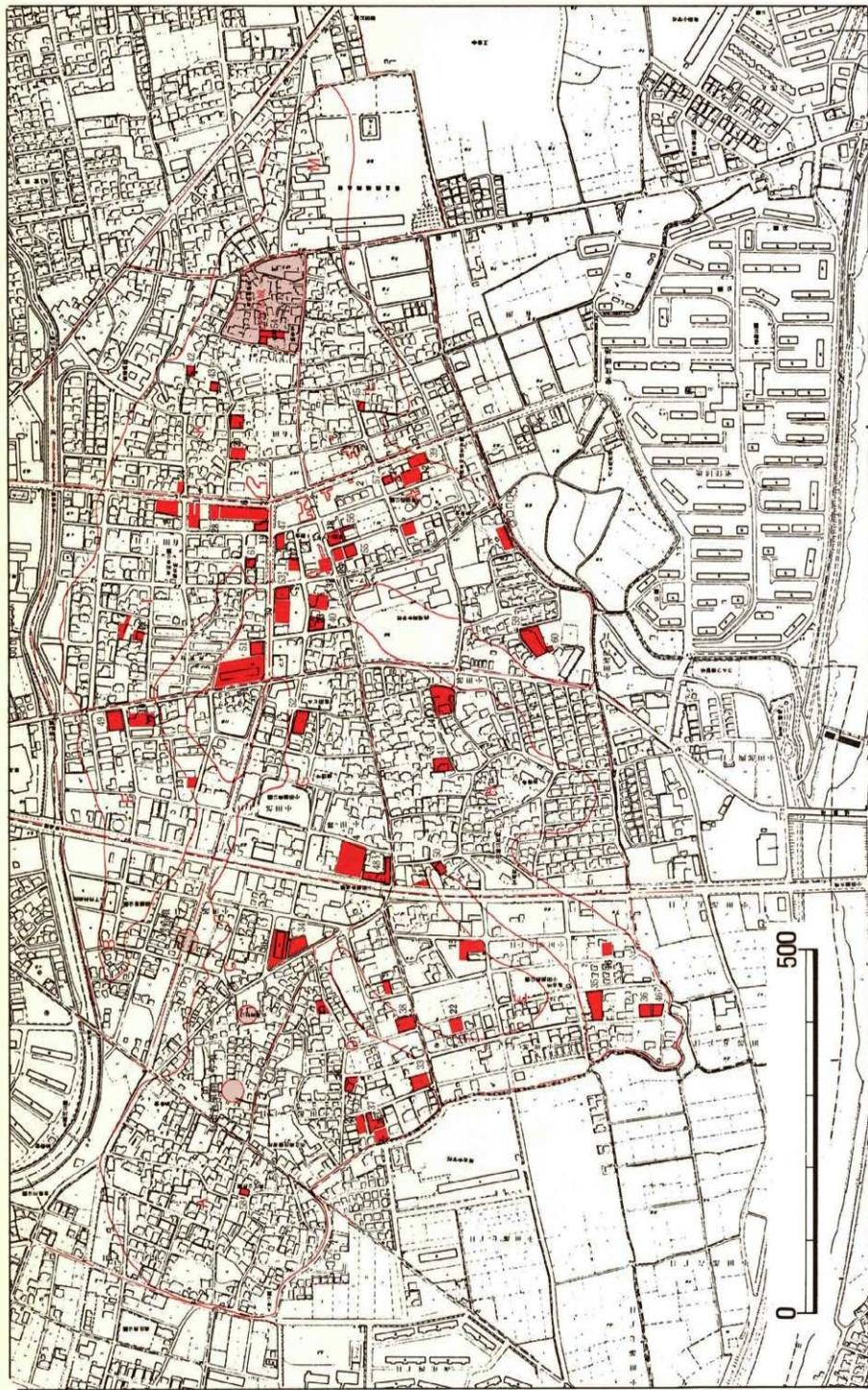


Fig. 2 有田・小田部台地と美濃橋地区 (1/5,000) ■数字は面積を表す。

500M

Fig. 3 有田・小田畠台地の田形図(1/5,000) ■赤枠は調査地点を表す。

⑤

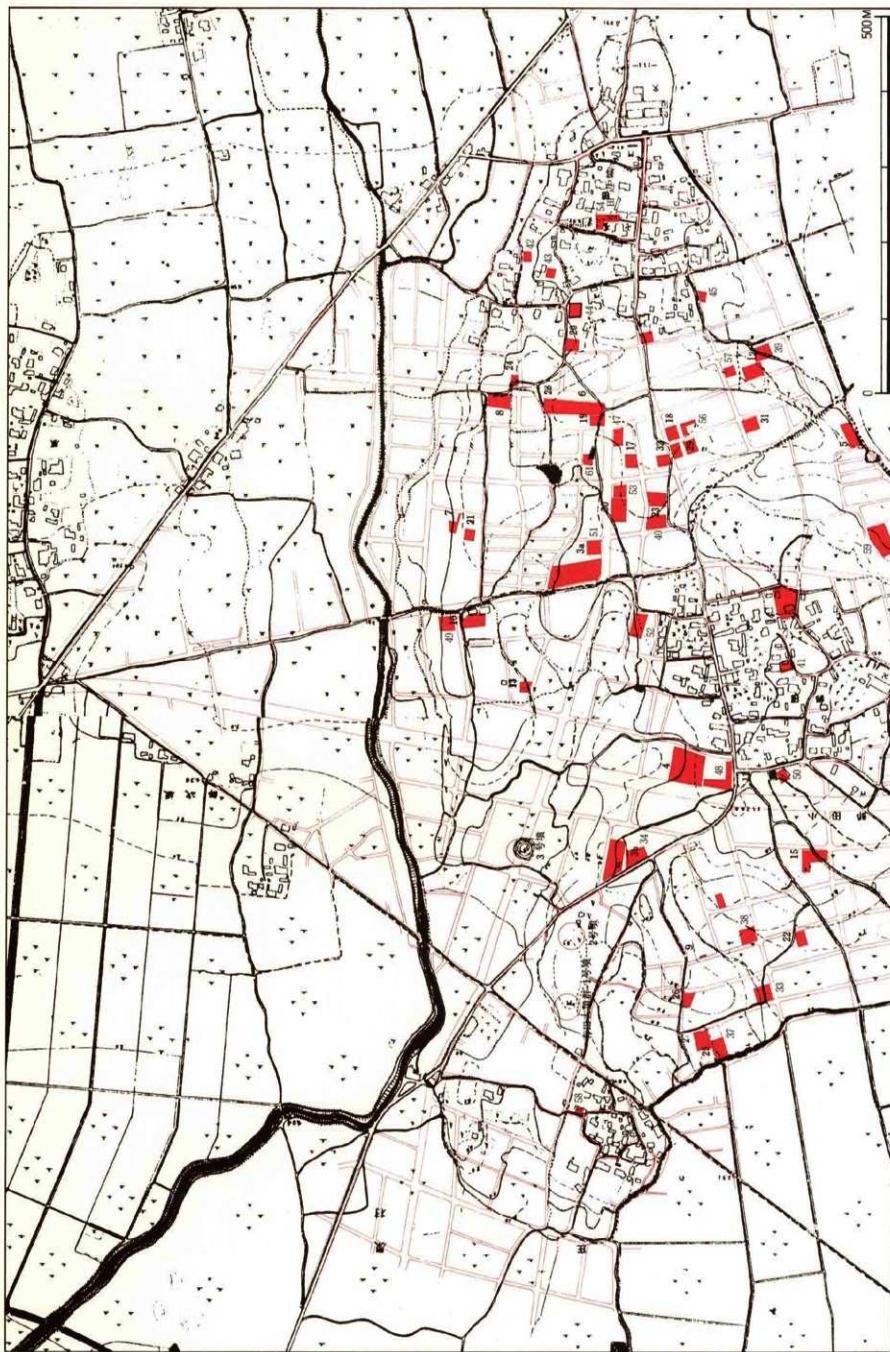




Fig. 4 有田地区調査地図(1/2,500) 墓地位置を示す

第III章 調査経過

1. 第59次調査

検出遺構

調査対象地全域に遺構を検出した。その時期は弥生時代前期末から近世の18C代に及ぶものである。弥生時代の遺構は住居跡、表棺墓、土塁であるが、削平のため残存状態は良好ではない。検出し得た遺構は台地の縁辺に位置していたものと考えられる。中世の遺構はこの台地上の主たるもので、13C～15C初頭迄の年代を考えられる。この時期の遺構は、土塁、掘立柱建物、溝、雨落ち溝状遺構などで、いずれも中世集落を構成する遺構と考えられる。残存状態は良好とは言えないが、西から東方向に深くなる包含層が堆積しており、又立地の項で述べたように、調査地の西側に比べ、東側の台地縁辺の残りが良いことなどから、或る時期に整地が施



Fig. 5 第59次 調査地点周辺図 (1/600)

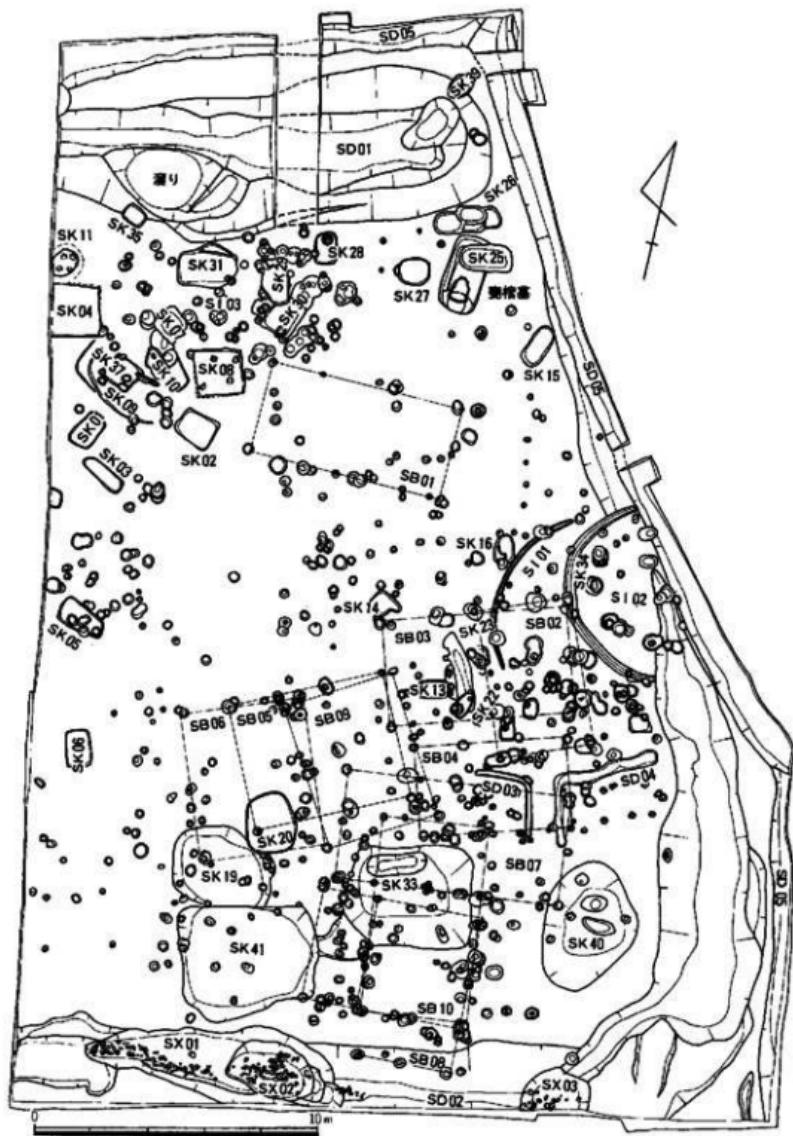


Fig. 6 造構配図 (1/200)

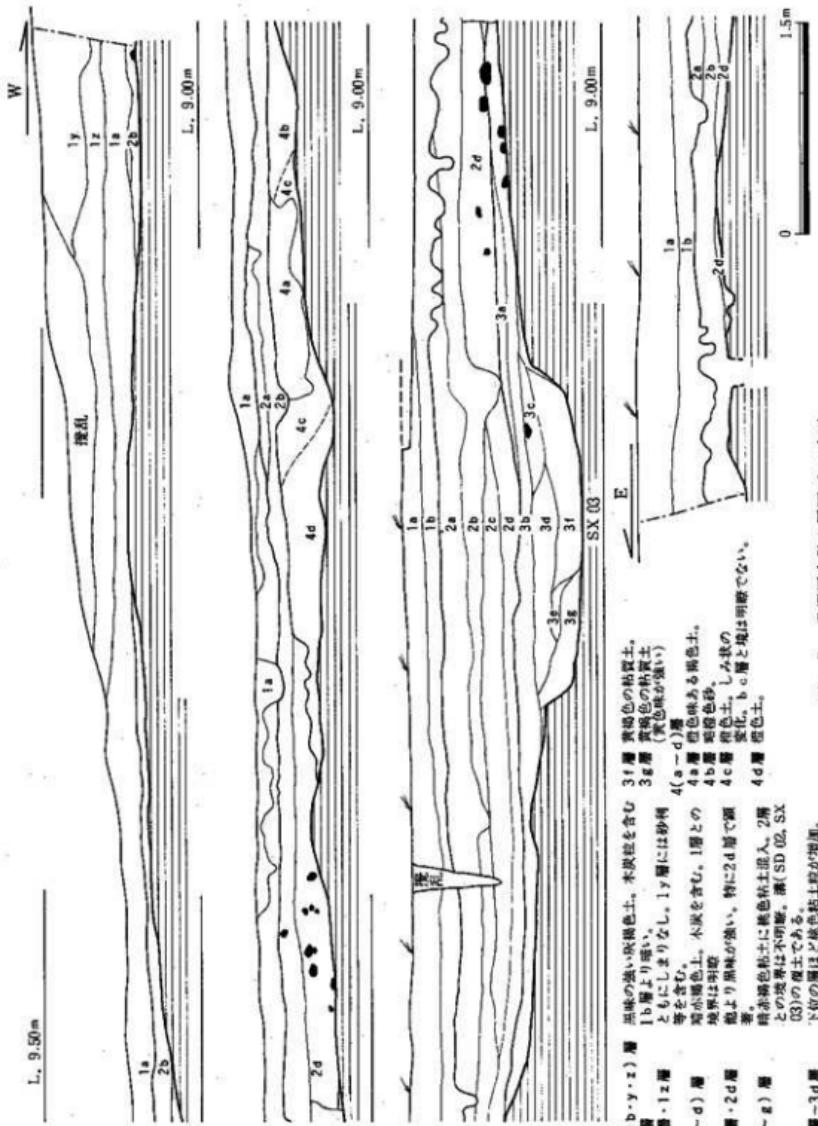


Fig. 7 基层区前壁示意图 (1/40)

(3)の覆土である。
位の層ほど桃色粘土層が増加。

3 a 層 -3 d 層

黒味の強い灰褐色土。木炭粒を含む 1b層より弱い、 ともにしきりなし。1y層には砂利 等を含む。 薄小球状上。木炭を含む。1層との 間は時計回り。 地盤より黑味が強い。特に2d層で顯著。	3t層 黄褐色の粘質土。 3g層 (黄褐色の粘質土 質) 黄褐色の粘質土。 4(a-d) 層 4(a-d) 層 4a層 仔鶴色土。 4c層 粘質土。 4d層 粘質土。
1a層 1y層-1z層	3t層 3g層
2 (a-d) 層	4 (a-d) 層
2 b層-2d層	4a層 4c層 4d層
3 (a-e) 層	仔鶴色粘土層入。2層 仔鶴色粘土層入。

こされた可能性もある。18C代には、この台地を開墾のための地行が行なわれた様で、調査対象地の区境いは段落ちになっており、その下位より伊万里系の土器が出土した。

住居跡 SI

住居跡として確認できたのは台地の東側で検出した2軒だけである。その他、北側において、環状に巡る柱穴群を確認しており、住居跡の可能性もある。確認した2軒は、いずれも弥生時代中期に属している。

SI 01, 02 (Fig. 8-9, PL. 5) 調査区の東側縁辺に位置している。住居跡01・02は重複しており、01が西にずれている。01は、周壁の削平を受け、壁下の周溝を残すだけである。02は東側の段落ち、並びに、SD 02によって削平され西側半分を残存する。01は円形住居跡である。削平のため、周溝の一部と柱穴を残すが、周溝の遺存する部分から、住居跡の規模を復元してみると、周溝の外径は推定形が7.8mとなる。この場合、平面形は径7.8mで描いた円と周溝のラインが一致するので、ほぼ正円に近い形状と思われる。周溝の覆土は黒褐色粘質土である。炉は削平のため検出できなかった。遺物は周溝から弥生式土器の土器片を検出した。

SI 02はやや楕円形を呈した円形住居跡である。東側をSD 02及び段落ちによって削り取られ、約1/3しか遺存しない。又、地山が西から東への傾斜に位置するため、西壁が最も遺存状態が良い。現存高30cmを測る。壁下には周溝が巡っており、幅10cm、深さ30cmを測る。SI 01と同様に、周壁から住居跡の規模、形状を復元してみた。残る周壁がいびつな平面形を呈しており、住居跡の南北壁は径6.5mを、東西壁長は径6.2mを測る値を得た。床面は、タタキ締められており、部分的に褐色粘質土の貼床が認められる。炉は検出できなかった。覆土は、SI 01と同様に黒褐色粘質土である。遺物は覆土中より弥生式土器片、黒曜石剝片類を、床面より風化剝離した石庖丁の破損品を1点出土した。柱穴は、各々、環状に巡るものと考えられるが、SI 01・02の切合いのため、いずれの住居跡に所属するか判然としない。そのため復元した住居跡の範囲内にある柱穴のうち、各々の周壁に沿って、一定の距離をもち、柱穴の深さ、径の規模が近似し、更に柱穴間の距離がほぼ等間隔に位置するものを描出した結果、Fig. 8に示した様にSI 01はP1~P6迄の柱穴が、SI 02はP7~P10迄の柱穴が考えられ、いずれも主柱は6本である。

以上のことから、住居跡SI 01、およびSI 02は円形もしくは、やや楕円形を呈した平面形をもち、主柱6本を有した弥生時代中期の住居跡である。

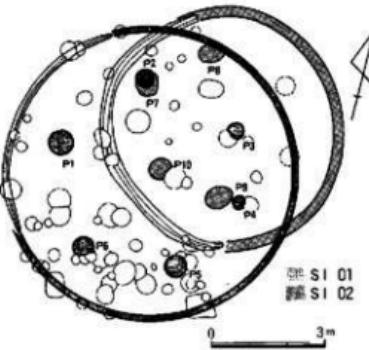


Fig. 8. 住居跡 SI 01, 02 復元図 (1/150)

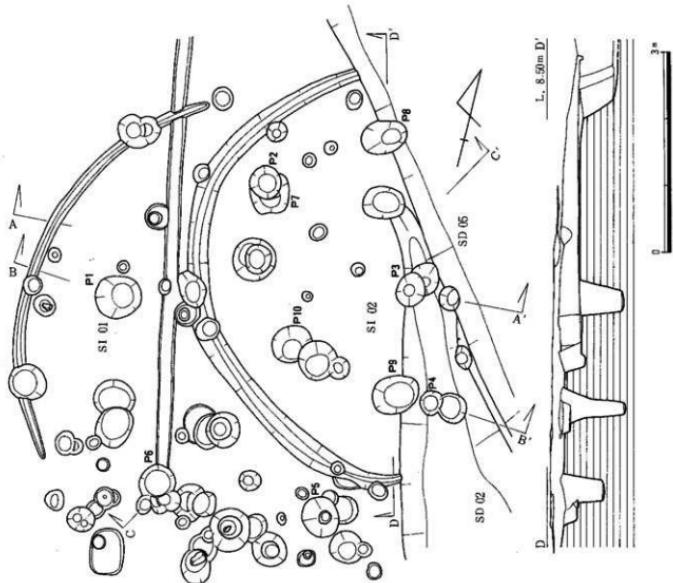
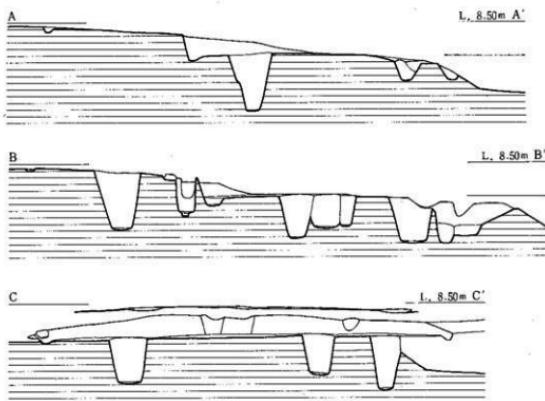


Fig. 9 住居層 SI 01, 02 (1/60)



柱穴群 1 (Fig. 10, PL. 5) 調査区の北辺部分は、中世の土塙、及び柱穴が集中しているが、その中で、径及び深さの規模が近似し、環状に巡る一群が存在する。P1~P8などが対象として考えられ、この柱穴は径約 25~60cm、深さ 50~70cm を測る。柱穴群は、SK 29, SK 30 の周囲に分布する。覆土は黒褐色土に八女粘土を多量に含んだ層を呈し、SI 01, 02 の柱穴覆土と変化は無い。又、中世の柱穴の覆土の大半が、暗茶褐色粘質土を呈しているのとは明確に相違する。

以上、P1 の覆土、規模からみて、この柱穴群は、環状に巡るところから、弥生時代の円形住居跡の主柱の残存したものと考えられた。しかし、柱穴内出土の遺物は、中世の遺物が大半を占めていることなど疑問も多い。この地帯は、弥生~中世の造構の切合が著しく、柱穴に

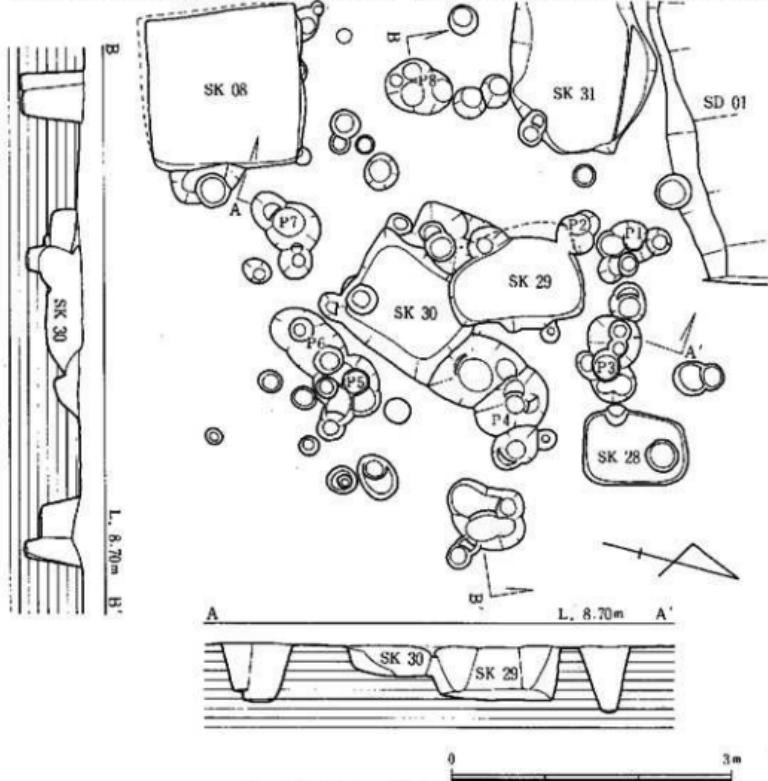


Fig. 10 柱穴群 SI 03 (1/60)

いたっては3~4つの柱穴が切合っている例が多いため、調査作業時に混入した可能性は充分に考えられる。とはいっても、遺物の取り上げ時に中世の遺物が検出された事実は否めず、この環状Pit群の構造、時期は、更に検討の余地がある。

喪棺墓 (Fig. 11, PL. 6・16) 遺跡の北東部分で検出した。上部を削平されているものの、残存状況は極めて良好であった。墓塙の東側をSK 25が切り込んでいる。墓塙は隅丸長方形を呈し、長さ275cm、幅144cm、深さ50cmを測り、底面は皿状を呈する。墓塙の南側小口には喪棺を据えるための掘り込みを設け、下窓の下半迄を挿入し、傾斜角26°で棺を設置している。喪形土器を2個体用いた接口式の合口喪棺で、主軸方位をN 8°Eに置いている。接合部分には、灰青色粘土を貼付けて目張りしている。上窓胴部の一部を破損しているが、良好な遺存状態であった。内部より副葬品の出土はない。喪形土器は、口縁の内外に粘土を貼付けて肥厚させ、上面を平坦にし、胴部下半が下彫れをした器形である。外面はナデ調整、頸部内面はヨコハケ調整となり、弥生時代前期末の時期が考えられる。

検出した喪棺は1基であるが、SD 01内より多くの喪片が出土しており、その内前期～中期前半迄の喪棺片が、6～7個体検出されている。喪棺が台地の縁辺にしか残っていないことを考え

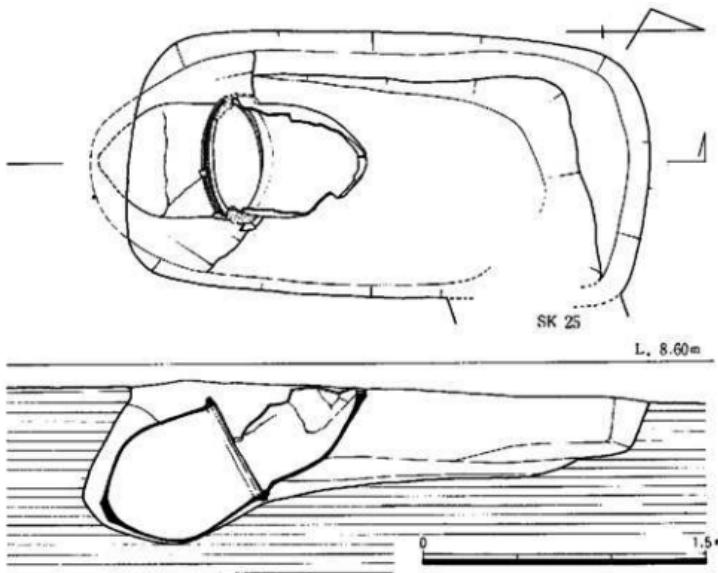


Fig. 11 喪棺墓 (1/30)

ると、中世に於ける地下げによって、多く喪棺群が失われたことも考えられる。

土 塙 SK

検出された土塙の总数は34を数える。土塙は出土遺物から判断して弥生時代前期から中世迄至るものと考えられる。土塙の時代別の内訳は、弥生時代前期～中期迄が5、中世と考えられる土塙は29である。

土塙の平面形は、大部分が隅丸の長方形プラン或いは隅丸形プランを呈し、幾つかは楕円形状を呈している。出土遺物については先述した通り、縄文時代晩期から15C代に至る遺物を出土するが、土塙に伴う時期の遺物は、弥生時代前期～中期、中世の13C～15Cの遺物に限られる。その他、炭化米を出土した土塙としてSD 01, 02, 03, 04, 08, 09, 11, 27があるが、いずれも覆土からの出土である。以下に述べる土塙の番号は、発掘調査時の呼称をそのまま用いたため、一部欠番がある。

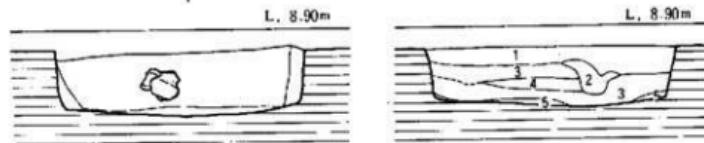
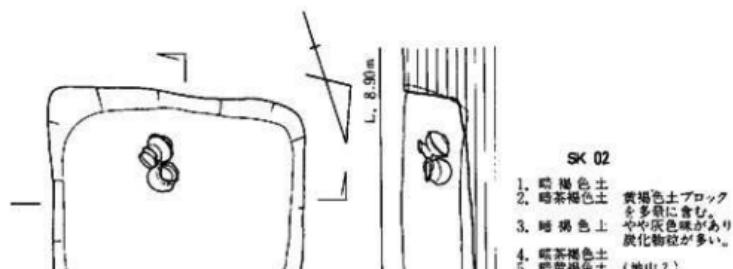
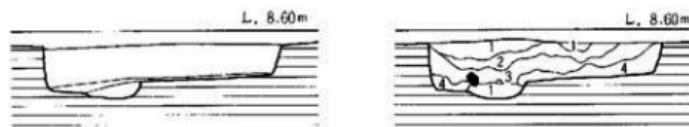
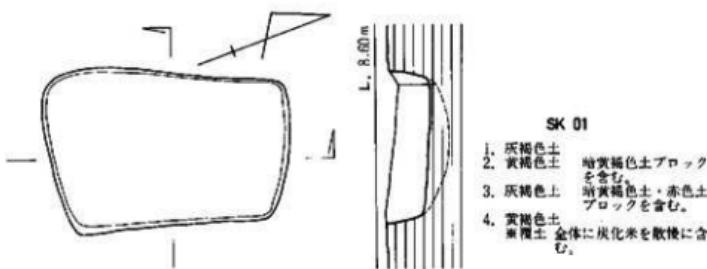
SK01. (Fig. 12, PL. 7・24) 調査区の北西部で検出した。主軸を北東に取り、長さ123cm、幅82cm、深さ25cmを測る。両側辺の長さが異なる不整長方形プランである。底面は南西部に凹凸があるが、ほぼ水平である。断面は低い逆台形状となる。覆土全体から炭化米が出土するが、まとまった状態で出土するのではない。土器は、すべて破片で覆土より出土した。弥生時代から中世に至るもので、中世の遺物には、土師器皿片と青磁がある。いずれも復元できない。

SK 02 (Fig. 12, PL. 7・24) 調査区の北部で検出した。長さ133cm、幅108cm、深さ35cmを測り、長軸を北西方向にとる。小口の長さが異なるが隅丸長方形プランを呈する。断面は低い逆台形状を呈する。底面は平坦である。底面には完形の壺形土器が2点、相接した状態で出土した。いずれも口縁を上位としている。覆土中より炭化米が多量に出土した。

SK 03 (Fig. 13, PL. 9・25) 南に位置し、長さ163cm、幅51cm、深さ13cmを測る。一部を後世の歴により削られている。主軸を北西方向に取り、長楕円形プランを呈する。断面形は浅い逆台形状をなす。底面は平坦である。遺物は覆土中より弥生式土器片が出土した。覆土中より炭化米を検出した。

SK 04 (Fig. 14, PL. 9・25) 調査区北西部で検出した。SK 11と切り合う。長さ197cm、幅156cm、深さ85cmを測る。平面形状は方形に近い長方形で、長軸方向は南北である。底部はやや袋状を呈しており、深さは検出した土塙の中では最も深い。断面形状は台形をなし、底面は平坦である。覆土は上下二層に分けられる。1層は暗茶褐色粘質土である。2層は黄褐色土、白色粘土(八女粘土)の大小のブロックを含む明褐色粘質土である。1層は2層に比べ暗くブロックの粒子は細かい。

遺物は覆土より土師器の杯、皿、須恵器、青磁、瓦質土器の擂鉢、砥石等の出土がある。1層から炭化米を検出した。SK 04はSK 08と覆土、形状、方向、規模等の点において類似性を



0 1.5m

Fig. 12 土 垢 SK 01, 02 (1/30)

もっている。又、SK 08同様に覆土の第1層から炭化米を出土する。SK 11との切合関係は、SK 04の壁がSK 11の袋状壁内に挿入されている。両者の覆土には相違がみられる。SK 04の覆土がSK 11に流れ込んだ状態でSK 11の南半分の底面にある。以下詳しくはSK 11の項で述べたい。

SK 05 (Fig. 13, PL. 10・25) 長さ173cm, 幅81cm, 深さ23cmを測る。主軸の方向は西北西で、SK 03とはほぼ同方向である。平面形は不整長方形プランといえるが、東側小口が他方より短い。断面の形状は低い逆台形状をなし、底にはPitを4箇所確認した。このPitは覆土から後世のものである可能性が残る。覆土は上層が黄褐色土ブロックを含む灰褐色土であり、下層は地山と区別し難い黄褐色砂質土で、この層から遺物の出土がある。遺物は覆土より出土した。弥生時代前期の土器片である。

SK 06 (Fig. 15, PL. 10・25) 調査区の西南側で検出した。長さ128cm, 幅79cm, 深さ11cmを測る。長軸方向は北北西である。平面形は隅丸長方形プランであり、断面形は浅い逆台形となる。底面はほぼ平坦である。遺物は覆土中より検出された。土師器片、陶器片である。

SK 07 (Fig. 15, PL. 11・25) 調査区の北西部で検出した。長さ104cm, 幅98cm, 深さ25cmを測る。主軸の方向を北西方向においている。平面形は不整隅丸方形プランで、断面形は深い皿形となっている。遺物は覆土中より弥生式土器片の出土があった。

SK 08 (Fig. 16, PL. 11) 調査区北西部で検出した。SK 04から東へ3mの位置にある。長軸の方向はSK 04とはほぼ同じ北北東である。長さ166cm, 幅151cm, 深さ80cmを測る。平面形は不整方形プランで、断面形状がやや袋状を呈した台形状をなす。以上の点もSK 04と同じである。ただ規模の点で長軸長がSK 04の方が30cm程長くやや細長いという違いはある。本例は、底面近くに配石をもつ。底面より20cmほどの土に4個の蝶が、同一の高さで置かれている。この蝶の底面の高さは第2層上面と一致する。蝶は20cmほどの円蝶或いは、角蝶状である。尚、底面は平坦である。SK 08の覆土はSK 04のそれとよく似ている。暗茶褐色土の第1層と暗茶褐色土上で黄褐色土、白色粘土ブロックを多量に含む第2層がある。炭化米が第1層から出土した。

遺物はすべて覆土中より出土する。第1層からは弥生式土器片、土師器の皿、杯、須恵器の甕と鉢、瓦質の鉢形土器、青磁の碗、皿、白磁。鉄製品として釘が1点、その他鐵津、剝片類が出土した。

第2層からは弥生式土器、土師器の破片、剝片類が出土している。以上のように各層から多くの種類の遺物が出土したが、その量は多くはない。

SK 09 (Fig. 17, PL. 22) SK 04とSK 08の間に検出した。南側壁の立ち上りをわずかに残している。現存長344cm, 現存幅132cm, 深さ5cmを測る。この中央部にSK 37があり、それと本遺構とが一連のものである可能性がある。本遺構の覆土除去後にSK 37を確認した。底面は平坦である。SK 37とした部分を除いては、覆土は薄く、出土遺物は弥生式土器、土師

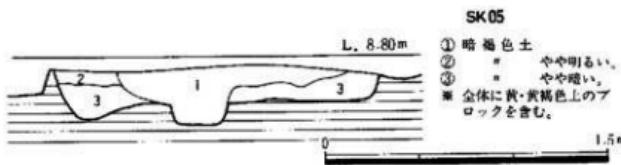
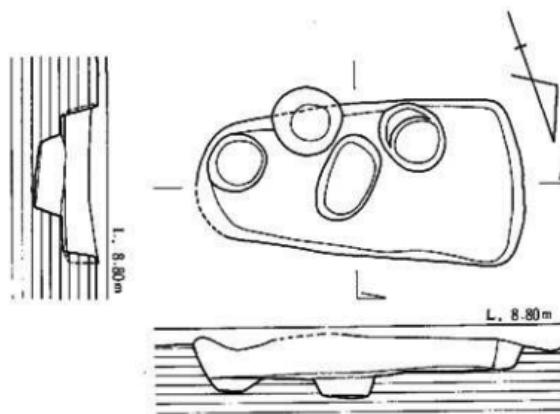
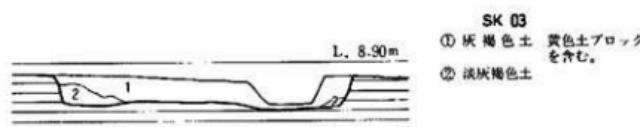
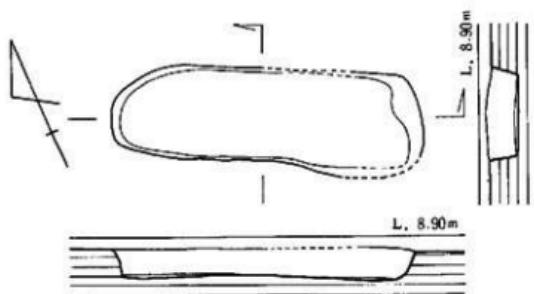


Fig. 13 土 坑 SK 03, 05 (1/30)

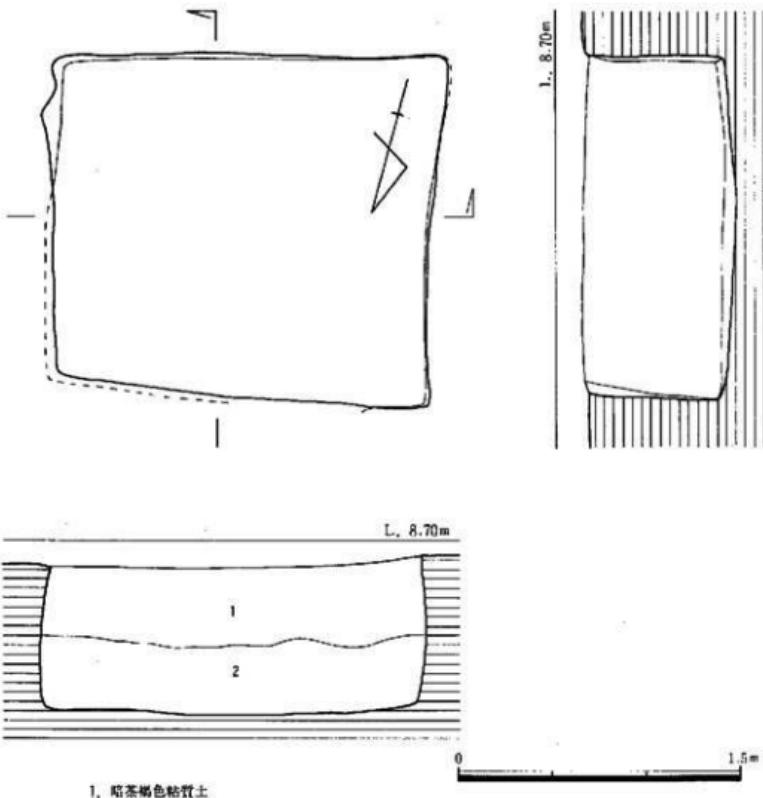
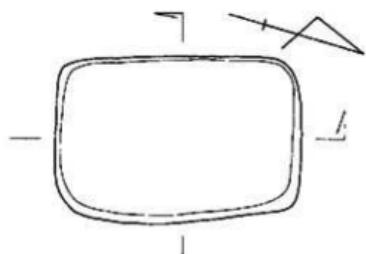
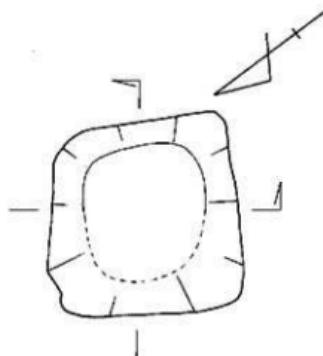
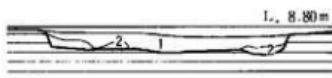


Fig. 14 土 坑 SK 04 (1 / 30)



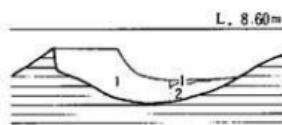
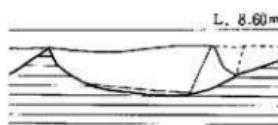
SK 06

1. 暗黄褐色土 黄色土ブロックを含む。しまりなし。
2. 黄褐色土 やや粘性あり。(地山?)



SK 07

1. 噴灰褐色土
2. 暗褐色土 やや赤味があり。赤色土白色
粘土ブロックを含む。



0 1.5m

Fig. 15 土 坡 SK 06, 07 (1 / 30)

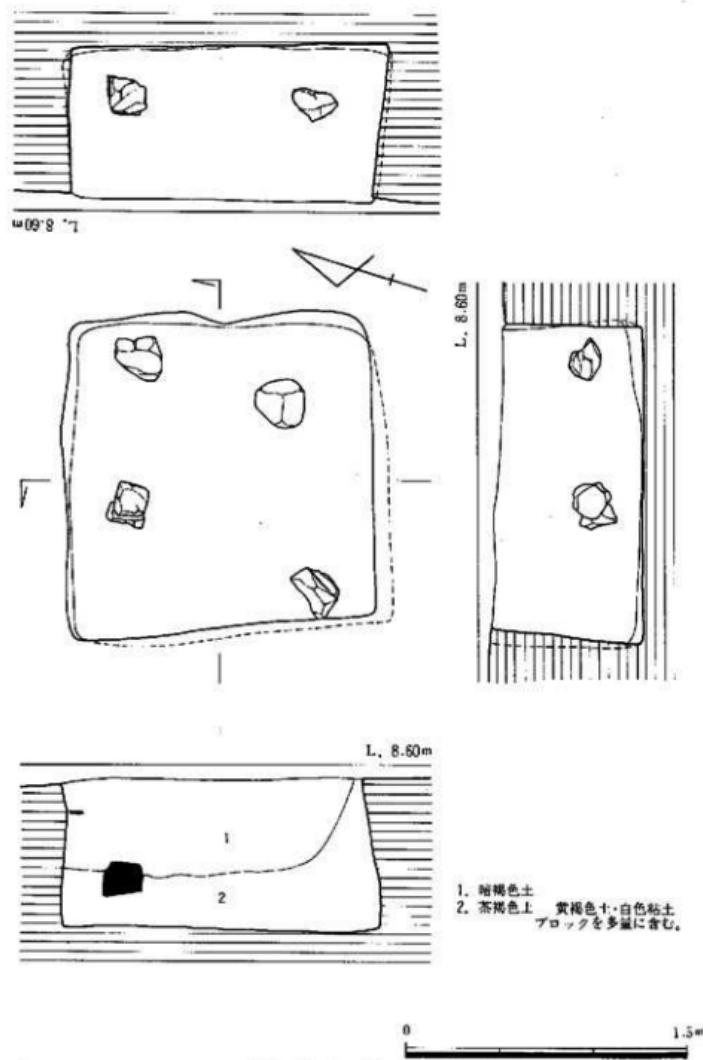


Fig. 16 土 塙 SK 08 (1 / 30)

器の破片、剥片類、炭化米が出土している。

SK 10 (Fig. 18, PL. 12) 後世の溝により半ばを削られており、壁の立ち上りがわずかに残る。残存する部分からすれば隅丸方形プランの平面形であり、底面は水平である。遺物は出土しなかった。現存長114cm、現存幅67cm、深さ2cmを測る。

SK 11 (Fig. 18, PL. 12) 調査区西壁に接し、SK 04と南側で切合う。土塙上面では口径78cm×70cmを測る。不整の方形状プランを呈し、内部は袋状に広がる。最大径は130cm×125cmを測り、底面は不整円形プランを呈している。底面までの深さは約69cmを測る。覆土は上部においては黒色及び暗灰色を呈し、有機質混りでしまりのない土である。下部では、SK 04の覆土が流れ込んだような状態がみられる。本例は、SK 08にみる様な大礫を使用しての配石がみられる。礫は円礫や角礫が使われており、5個の礫が開口部の形状に対応するかの様にほぼ同一の高さで配されている。又、礫と同じ高さで、四耳壺が横位置で出土している。その他遺物はすべて覆土より出土した。土器はほとんどが小破片である。土師器は杯、皿、甕が、須恵器は高台杯、瓦器は措鉢、磁器は碗、剥片類が出土した。炭化米が検出されているが、SK 04の覆土がSK 11の下部に多量に流れ込んでいることを考えると、本来、本遺構に伴うものと断定はできない。SK 04との切合いは、両者の覆土に明らかな差を有しており、SK 04の覆土がSK 11内に流れ込む状態からみて、SK 11が先出したものとみることができる。しかし、SK 04を埋めもどす過程において流れ込んだ状況を考えると、明らかにSK 11は埋っていない空洞の状態であったとも言える。と言うことは両者が同時に存在したか、或いは相前後する時期に作られ、廃棄されたと考えられる。

SK 13 (Fig. 19, PL. 13) SK 21, 22と切合った状態で、長軸が北東方向となっている。平面形は隅丸長方形プランである。断面形は深い皿状に近い。遺物は検出できなかった。長さ110cm、幅59cm、深さ33cmを測る。

SK 14 (Fig. 19, PL. 13) 発掘区中央部で検出した。平面形は不整隅丸方形プランである。主軸方向は北西方向である。断面形状は低い逆台形となる。遺物は検出できなかった。長さ73cm、幅73cm、深さ13cmを測る。

SK 15 (Fig. 19, PL. 15) 発掘区北東部に位置する。長さ150cm、幅69cm、深さ32cmを測る。長軸の方向は北北東である。平面形は長橢円形で、断面形状は、横断面では深い皿状に近く、縦断面ではほぼ水平な底面を示す。遺物は全て覆土より出土した。弥生式土器片、剥片類がある。礫石が底面よりやや浮いて、壁際で出土した。

SK 16 (Fig. 20, PL. 16) 発掘区中央東部分に位置する。長軸方向は略北で、梢円形を呈する土塙である。断面形状は浅い逆台形である。遺物は覆土より出土するが、土師器の皿片、剥片類である。長さ100cm、幅56cm、深さ19cmを測る。

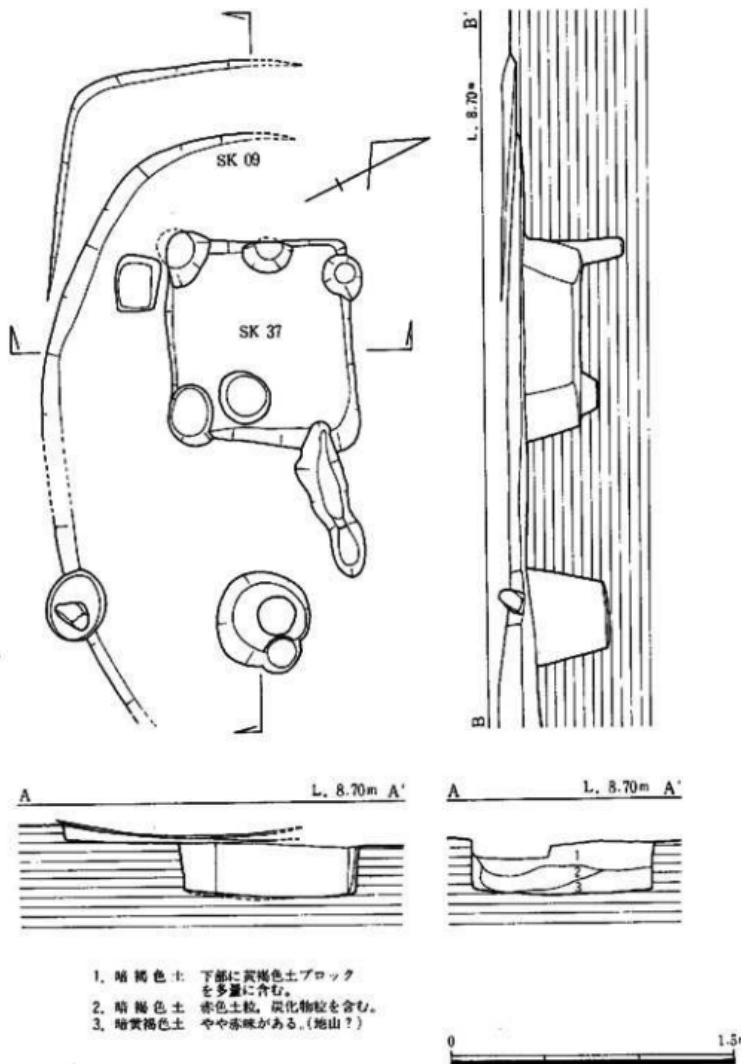


Fig. 17 上: 塙 SK 09, 37 (1/30)

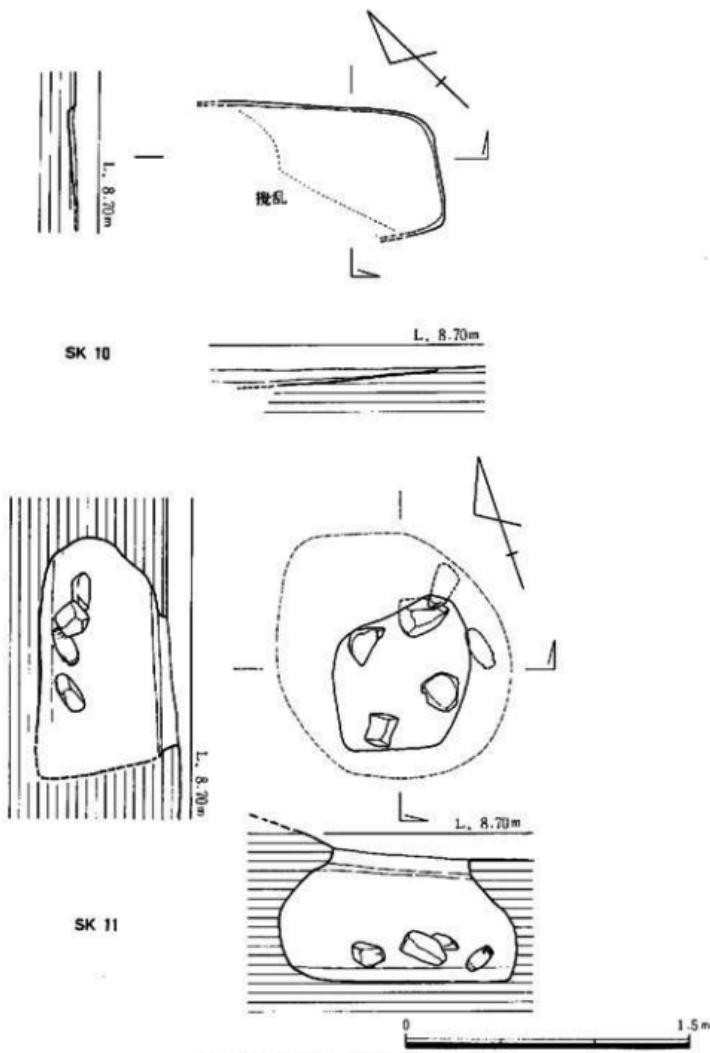
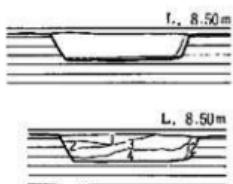
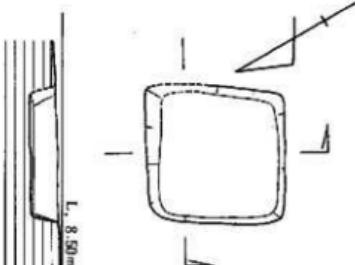
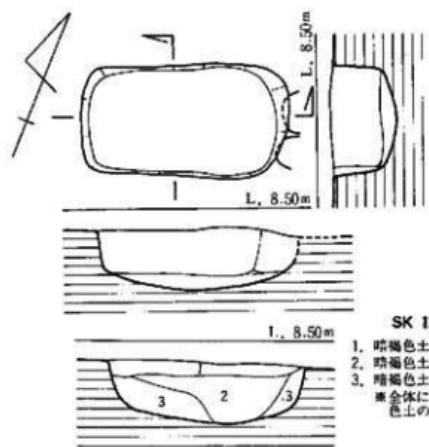
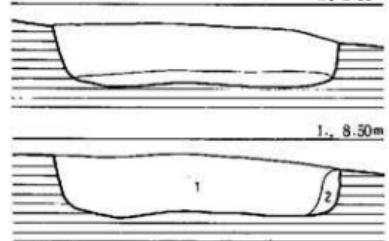
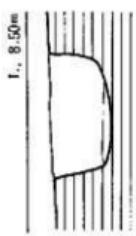
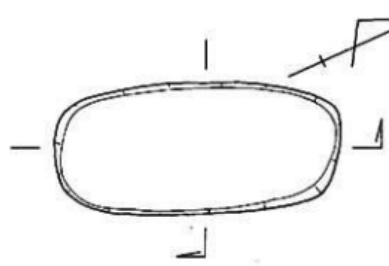


Fig. 18 土 塚 SK 10, 11 (1 / 30)



- SK 14
1. 灰褐色土
 2. 灰黄褐色土
 3. 灰褐色土 (やや暗い)
 4. 灰黄褐色砂質土
- *1,2,3には赤褐色土、黄色土のブロックを含む。



- SK 15
1. 暗褐色土 黄褐色土上ブロック、炭を含む。
 2. 黄褐色土 粘性が強い。



Fig. 19 土 塙 SK 13, 14, 15 (1 / 30)

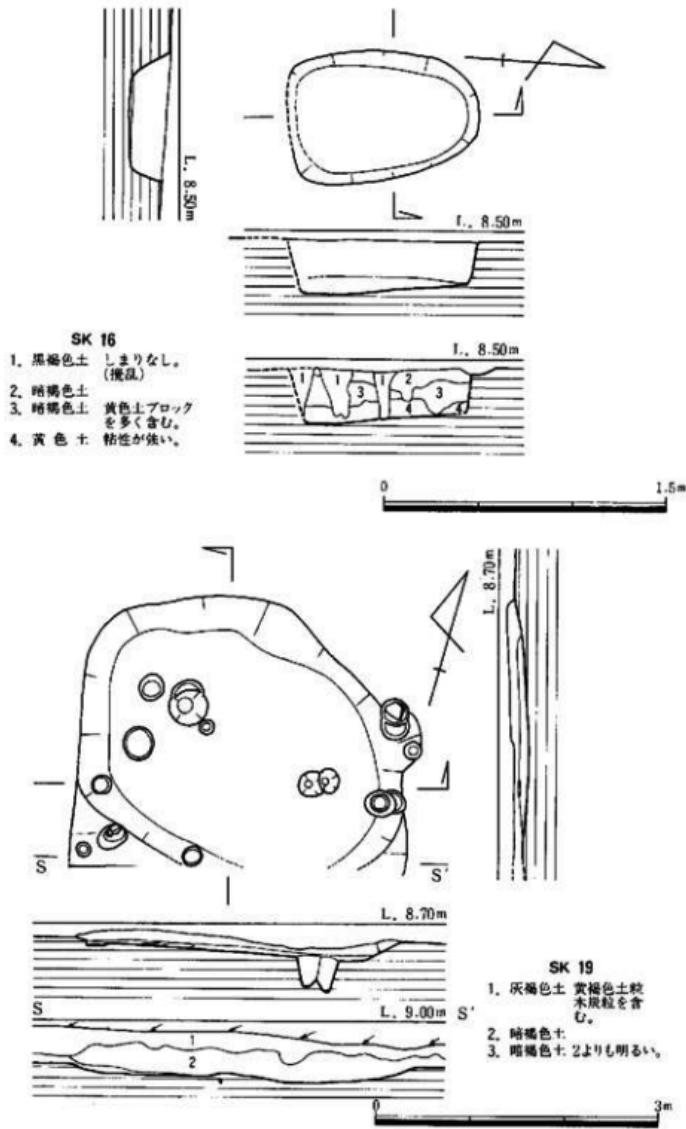


Fig. 20 土 塚 SK 16, 19 (1/30, 1/60)

SK 19 (Fig. 20, PL. 15) 発掘区南部で検出した。平面形は不整形状プランをなす。断面形状は極浅い皿状をなす。本遺構に接して南側に SK 41 を設定したが、遺構配置図に示される様に、接している。この部分は発掘区の境界にあたるため両者の関係は重複するものなのかな、また、同一の遺構なのか判断がためらわれる。規模は東西長346cm、南北長279cmである。但し、南北長は発掘時に設定した壁までの値である。最大の深さは16cmである。中央南北方向、南端西方向の土層からすれば、暗茶褐色土が基本であり、底面近くでやや暗く、北に寄って黄褐色土ブロックが多く含まれる。遺物は破片で出土し、弥生式土器、須恵器、土師器の杯、皿、瓦器の握鉢、椀、土師質土器の鍋といった器形がみられる。

SK 20 (Fig. 21, PL. 15) SK 19をその北東部で切込んでいる。長軸方位は略北である。平面形はやや角張るが、椭円形である。断面形状は、底面の平坦なことにより、低い台形状をなす。遺物は、覆土中より土師器を検出した。長さ215cm、幅176cm、深さ19cmを測る。

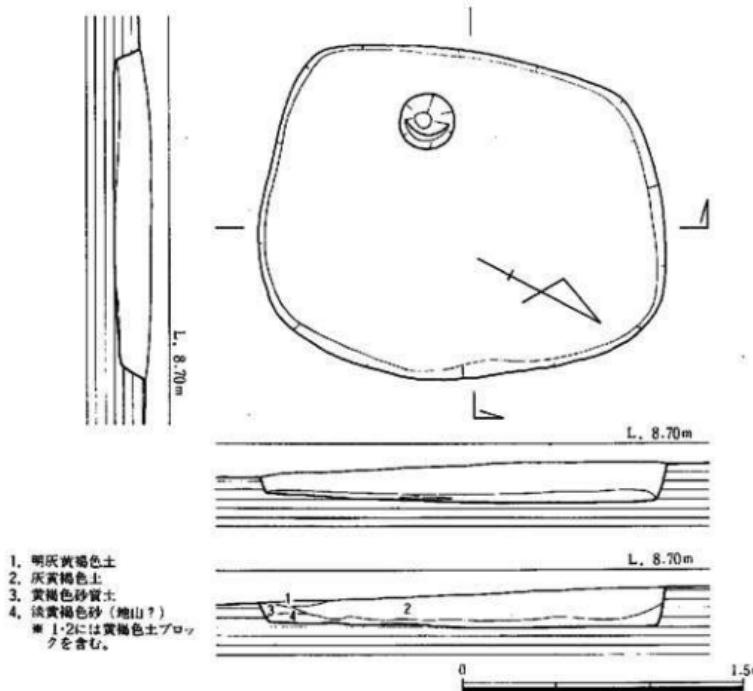


Fig. 21 土 塙 SK 20 (1/30)

SK 21 (Fig. 22) 土塙というよりは溝状の遺構とすべきかもしれない。その主軸方向は北北西であり、北部は緩い傾斜をもって浅くなっている。中央部の横断面は浅い逆台形状を呈する。覆土は暗黄褐色土である。遺物は覆土中より土師器と土師質土器の鍋がいずれも破片で出土している。長さ289cm、幅58cm、深さ22cmを測る。

SK 22 (Fig. 22) SK 21の南端を切り込んでいる。長軸方向は北東方向。平面形は隅れ長方形プランである。西端の底に Pit があるが、これと本遺構との関係は、土層からでは、Pit が先立つものと考えられる。底面はこのようなこともあって凹凸が著しい。断面は浅い逆台形状といえよう。覆土は全体に黄・黄褐色ブロックを含んだ暗黄褐色土で、中位がやや明る

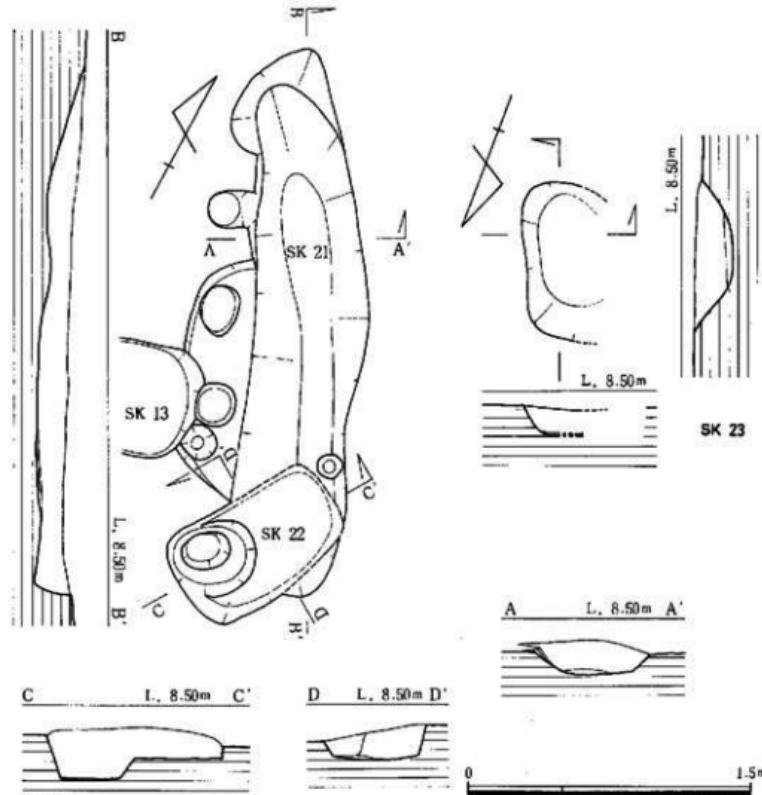


Fig. 22 土 塙 SK 21, 22, 23 (1 / 30)

い色調となる。覆土中より遺物が出土している。土師器と青磁で、いずれも破片である。長さ93cm、幅55cm、深さ27cmを測る。

SK 23 (Fig. 22) SK 21の東に位置し、後世の溝によって半分を削り切られているが、平面形は隅九方形プランをしていたと思われる。長軸方向は北北西の方位である。断面形状は深い皿状をしており、暗黄褐色の覆土が埋めている。遺物は検出されなかった。現存長82cm、現存幅32cm、深さ21cmを測る。

SK 25 (Fig. 23, PL. 16) 発掘区東北部、土塙等のやや集中する部分に位置する。長軸方向は西北西である。盃棺墓を切込んでいる。底面はやや丸味をもち、断面形状は逆台形に近い。深い皿状である。遺物が覆土中から検出された。弥生式土器片、土師器片、須恵器片と釘と思われる鉄製品が上部で出土し、又、剝片類も検出された。長さ153cm、幅95cm、深さ36cmを測る。

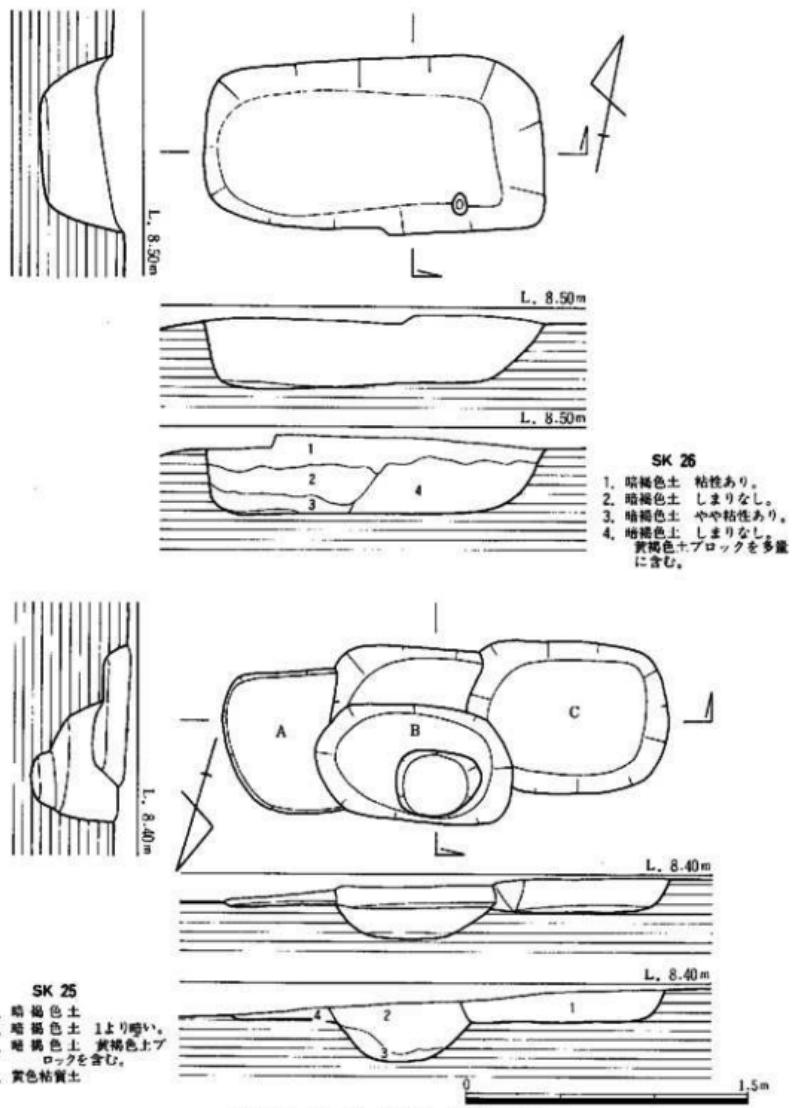
SK 26 (Fig. 23, PL. 16-17) SK 25の北に位置する。平面形状からすれば、ひとつの中土塙ではなく、3基の隅丸長方形プランを呈する土塙が、同じ長軸方向で配列した結果かとも思える。確認面での覆土の状況では明らかにできなかった。しかし土層図では、西から東の順に新しい土塙と考えられる。この場合、覆土に顯著な差はなく、いずれも暗褐色土である。ただ中央のものが、他よりもやや暗く、その下部で黄土色ブロックを含むという違いがある。断面形は中央の形狀がはっきりしないが、他は低い逆台形状である。遺物は土師器、須恵器の小破片の他に剝片類の出土がある。いずれも覆土中より出土している。各々の計測値は、Aの遺存部が長さ52cm、幅75cm、深さ6cm、同様にして、Bが101cm、61cm、35cm、Cが106cm、80cm、19cmを測る。

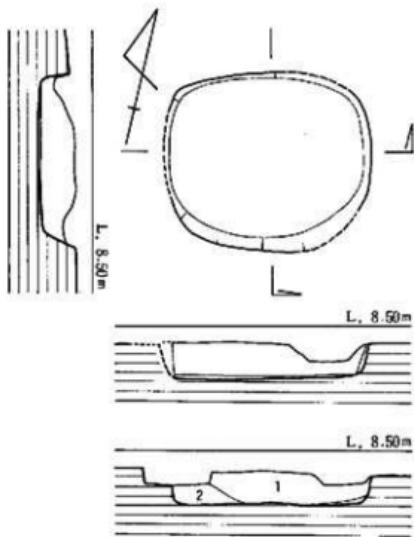
SK 27 (Fig. 24, PL. 18) SK 25の西に位置する。長軸方向を東北東にとる。殆ど構円形に近い隅丸長方形プランである。断面は浅い逆台形状である。出土遺物はない。わずかに炭化米が覆土中から検出された。長さ110cm、幅95cm、深さ20cmを測る。

SK 28 (Fig. 24, PL. 18) 発掘区北西部の東端に位置する。長軸方向は北北西で、隅丸方形プランを呈す。断面は浅い逆台形状である。遺物は、覆土中から、須恵器片、土師器片、石斧の破片、剝片類が出土した。長さ109cm、幅80cm、深さ10cmを測る。

SK 29 (Fig. 25, PL. 19) SK 28の西に位置する。長軸の方向は北西である。当初、遺構面では、別の土塙に切込んだ隅丸長方形プランの土塙と考えられた。西側の覆土と変化がなかったので発掘したところの土塙の形狀は、西へ広がった幅広の隅丸長方形プランとなった。西側壁は袋状を呈す。遺物は、覆土中より土師器の小破片、剝片類が出土している。長さ137cm、幅68cm、深さ55cmを測る。

SK 30 (Fig. 25, PL. 19) 北端をSK 29に切られる。隅丸方形プランの七塙である。主軸方向を北北東に置く。断面は浅い逆台形状といえるが、底面には不規則な凹凸がみられる。





SK 27
1. 暗茶褐色土 粘性がある。
2. 暗茶褐色土 黄褐色土を多量に含む。

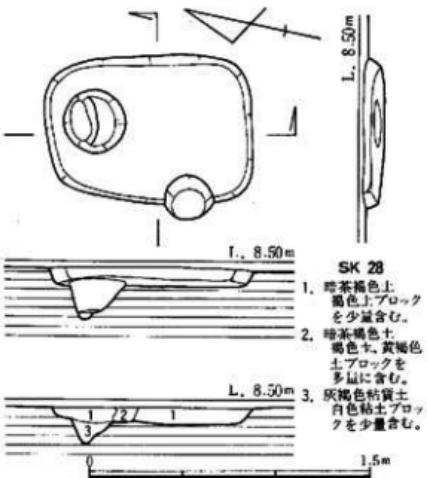


Fig. 24 土 塚 SK 27, 28 (1 / 30)

遺物が覆土中より出土した。弥生式土器の甕、壺の他、剝片類に加え、土師器が1片出土した。土器はいずれも小破片である。

SK 31 (Fig. 26, PL. 20) SK 29の北西に位置する。長軸は東北東の方向をとる。2つの土塚の重複したものである。SK 31が切込んでいる。隅丸長方形プランを呈する。断面は東端がえぐれ込んだ状態を示す。底面は東南角に向って深くなっている。覆土は暗褐色土であり、少量の炭化物を含む。ブロック状の土は混ざっていない。遺物は覆土中よりの出土で、土器は弥生式土器、須恵器の杯盤、杯身、土師器の杯、皿、磁器では青磁、白磁、瓦質土器の措鉢、須恵質土器といった種類のものが、いずれも小破片で出土している。又、剝片類も出土している。長さ208cm、幅132cm、深さ31cmを測る。

SK 33 (Fig. 27, PL. 20) 発掘区の南部で検出された。平面形状は不整長方形プランである。長さ436cm、幅347cm、深さは16cmを測る。断面形状は極浅い皿状となる。覆土は暗褐色土でややしまりがない。SK 33とSK 41は、溝状の遺構で接続しているが、この溝状構造とSK 33, 41との関係については覆土の観察からは結論が得出なかった。遺物が覆土中より出土した。土師器の杯と須恵器の破片である。

SK 34 (Fig. 27, PL. 21) 発掘区の中東部に位置する。長軸は北北西方向である。後世の溝により一部削り取られているが、平面形は梢円形と思われる。住居跡SI 02を切込んでいる。断面形状は深い皿

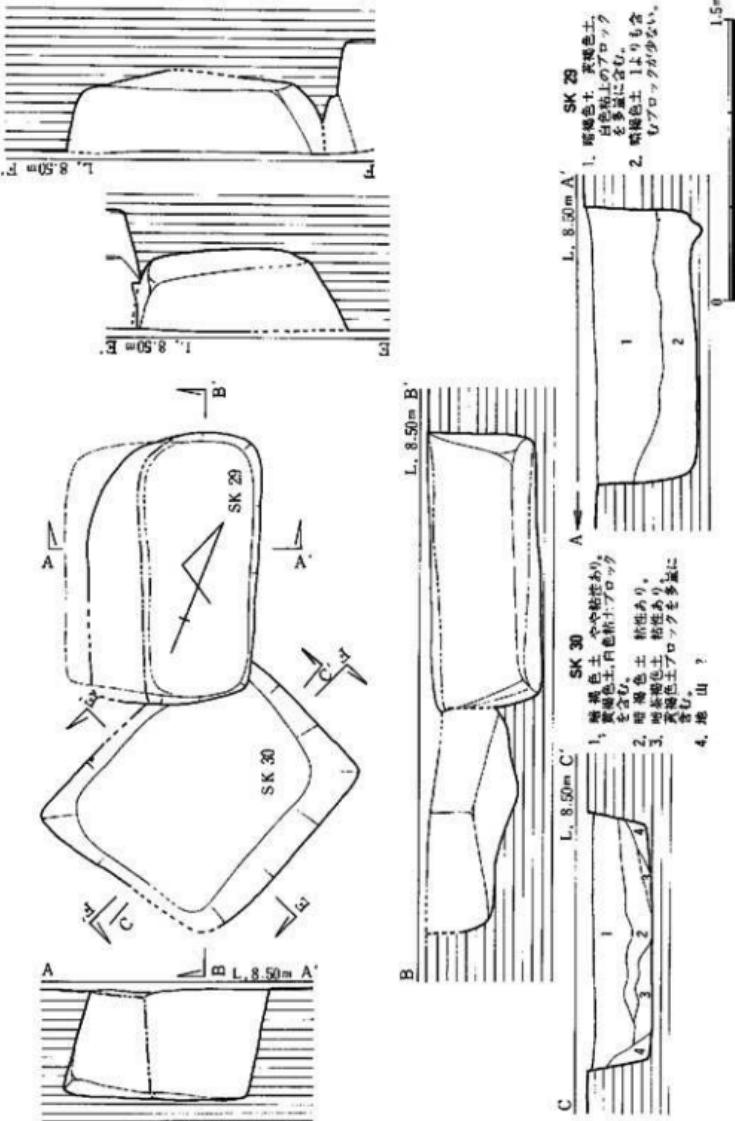


Fig. 25 上 塗 SK 29, 30 (1/30)

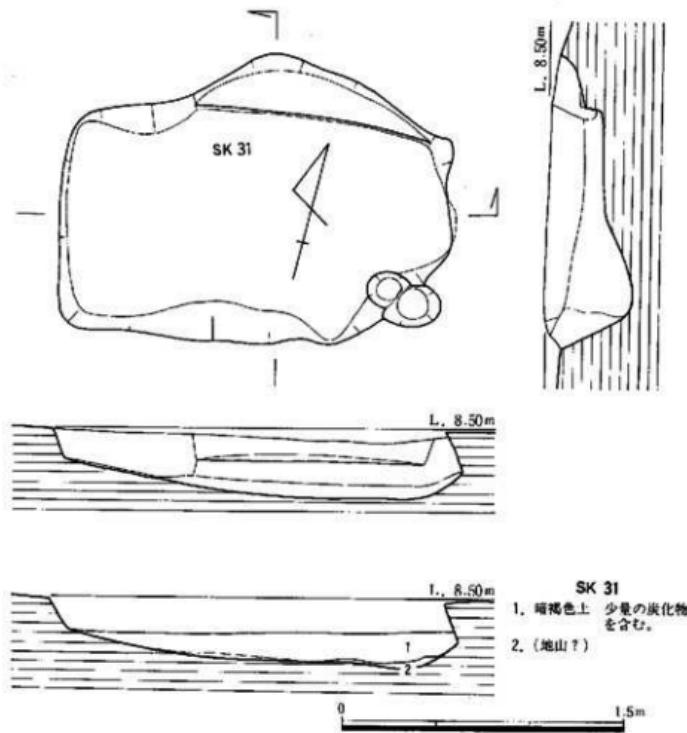


Fig. 26 土 坂 SK 31 (1/30)

状である。覆土は暗灰褐色土であるが、他の土坂の覆土よりも黒味が強い。遺物は土師器片と金属製品として鉄釘と思われるものが検出された。長さ83cm、幅約30cm、深さ16cmを測る。

SK 35 (Fig. 27, PL. 21) 発掘区の最も西北端に位置する。溝SD 01の北肩にかかっている。長軸を西北西方向に置いた、平面形が隅丸長方形プランの土坂である。断面は浅い逆台形状をなす。遺物は覆土中より検出された。土師器片と剝片類である。長さ80cm、幅60cm、深さ31cmを測る。

SK 37 (Fig. 17, PL. 22) SK 09内に掘り込まれている。長さ107cm、幅96cm、深さ16cmを測る。長軸を西北西に向いている。SK 09との関係は既に述べた通りである。平面形は不整の方形であり、断面は低い台形状に近い。底面は、南に向ってやや傾斜している。遺物は、弥生式土器、土師器、須恵器の小破片、更に剝片類が覆土中より出土している。

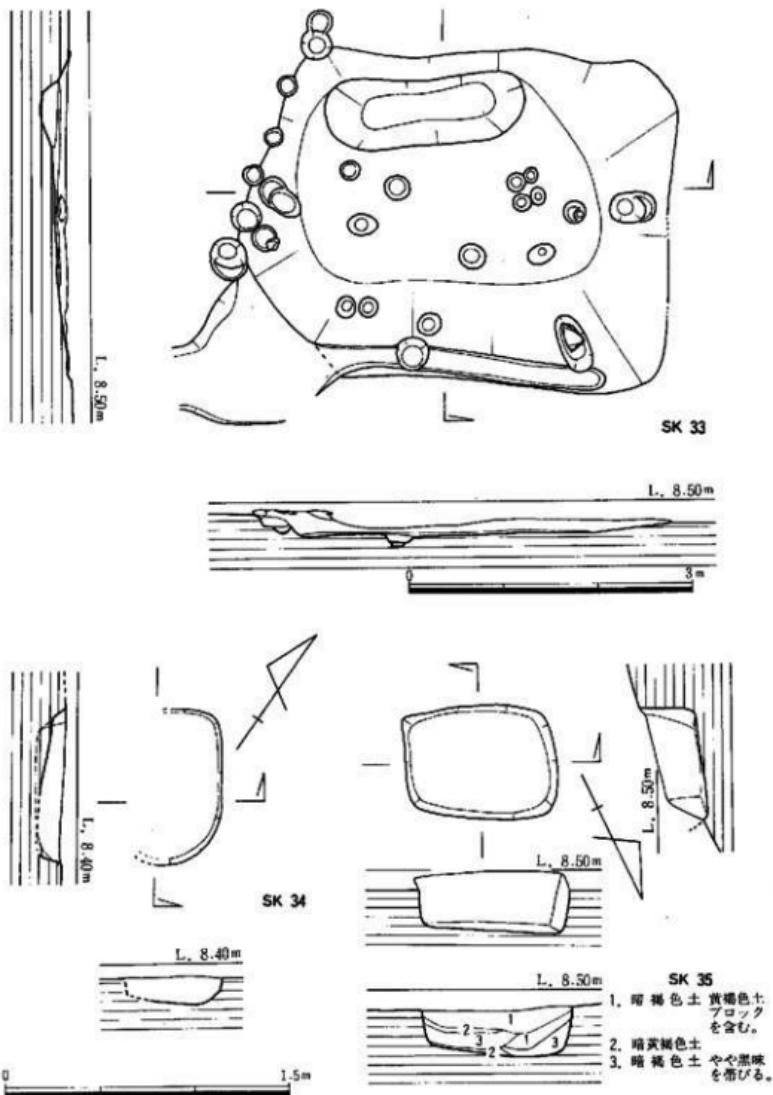


Fig. 27 土 塚 SK 33, 34, 35 (1 / 60, 1 / 30)

SK 39 (Fig. 28, PL. 24) 発掘区の北東隅に位置する。長さ100cm, 幅71cm, 深さ16cmを測る。長軸が北東方向で卵形の平面形を呈し, 断面は皿状である。溝SD 01と切合っているため, 深さなど不明であるが, SD 01以降と考えられる。

遺物は、弥生式土器片が多数出土、内1点土師器の皿片が出土した。この土器は糸切り底である。いずれも土器は底面よりやや浮いた状態で出土している。弥生式土器片は同一個体のものである。後世に掘り出した甕棺片を一括して埋納したものであろう。

SK 40 (Fig. 28, PL. 4) 発掘部の南東隅部に位置し、長軸は北方向にある。歪な椭円形プランを呈しており、断面は、ごく浅い皿状となる。覆土は有機物混りの暗褐色土で、弥生時代の甕棺片、土師器片を出土する。長さ466cm、幅328cm、深さ7cmを測る。

SK 41 (Fig. 29, PL. 22-23) SK 19の南に、接している。両者の関係が明らかでないことは既に述べた通りである。ただ両者の覆土には若干の相違があり、又、SK 19の底面よりSK 41の底面が一段低く、かつ、両者の境界部で一段高い部分があるので、一応別の土塙としたい。長さ481cm、幅440cm、深さ22cmを測る不整長方形プランを呈する。断面は皿状を呈す。

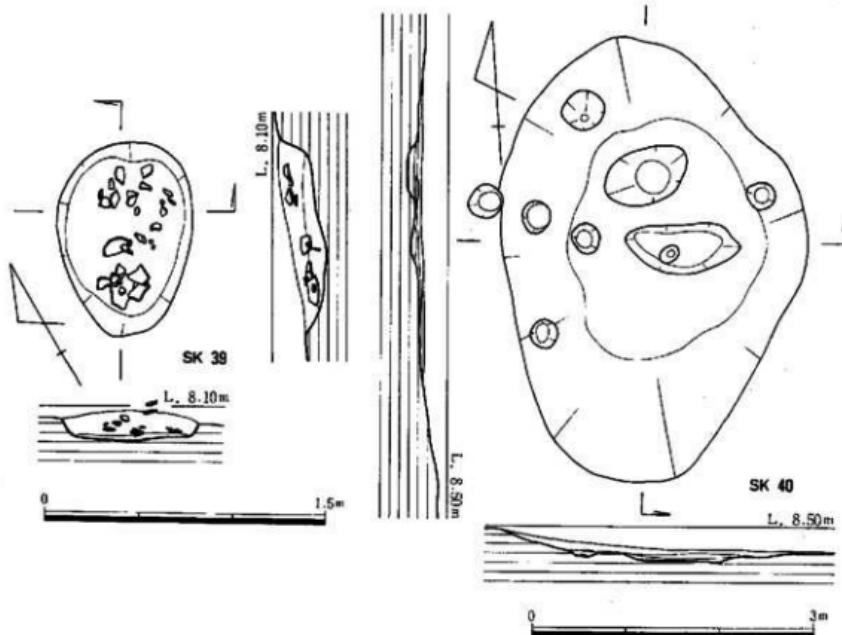


Fig. 28 土 塙 SK 39, 40 (1/30, 1/60)

遺物は土師器が主で、西寄りに集中する部分がある他は、散在する。集中部では底面のピットに皿、杯が流れ込んでいる状況がみられる。殆どの土器が底面より浮いた状態で出土している。遺物の種類は土器では土師器が大部分を占め、器形は杯と皿のみである。数量の多さと、完形品、大破片の多いことも注意される。土師器の他には、土師質土器の鉢、土鍋が、瓦質土器の捏鉢、須恵質土器の甕、鉢という器形がある。又、土鍬、鉄鋤、剝片類もみられる。

溝 SD

調査地の北側に1条、東南側に1条の溝を検出した。他に鉤形に曲がる溝状の小溝を2条検出した。SD 01は発掘区の北端部にあって、東西方向に伸びる溝である。SD 02は調査区の西南区から、東側縁辺迄巡る溝である。SD 03は発掘区東南部にあり、幅0.2乃至0.3mで鉤形に對置した小溝で、東側の溝をSD 03、西側の溝をSD 04と呼称する。いずれも中世の時期に形成された遺構である。

SD 01 (Fig. 30, PL. 27・28) 調査区の東側縁辺にあって、主軸を東西方向に置き、西側で底部を形成して溝は終る。現存長15m、最大幅3m、深さ1.1mを測る。溝幅は西側が広くなる。溝の断面はU字状を呈し、底面はやや平らである。そして、東側、先端方向に傾斜している。両肩は二段掘りになっている。特に両肩は顎著である。すなわち、1段目は、浅いレンズ状の掘込みで、深さ0.3mを、幅は東半部で4mを測る。2段目の壁の立ち上りは直であって掘り方幅が2乃至3mある。この溝の中間のところでは、長径5m×短径2.5mの溜り状の遺構が付設しているが、これは土層でみるとかぎり、SD 01を切っている。溝の埋没後に掘削されたものと考えて良いだろう。また1段目の掘り方斜面には、SK 35、SK 39が切合っている。ところで、この1段目の緩傾斜面の形成は、SD 01の埋没する過程で、或いは現存時に、雨水等の浸食等により削平された可能性がある。SK 35もSK 39との覆土の変化は差程なく、調査の時点では前後関係を把握することができなかった。又、SK 35の内部からは土師器を、SK 39からは弥生式土器に加え、土師器片が出土しているので、SD 01の時期と余りかけ離れていない時期であると思われる。SD 01からは、土師器の杯、皿を多く出土し、土師質土器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器類等が出土している。また溝東側の底では、弥生時代の甕棺破片が、→括して捨てられたような状態で出土した。この甕棺は、前期末から中期中頃迄の時期で、4~5個体あると思われる。このことは、この遺跡に甕棺群が存在したことを見ている。また、溝底、或いは底直上で、河原礫が検出されたが、礫の量も少なく集石度も悪いことから、落ち込みの礫或いは溝の廃棄時に投棄されたものであろう。

SD 02 (Fig. 31, PL. 29・30・31・32) 調査区の東側縁辺部分及び、南側縁辺に、鉤形に曲った溝である。溝幅、溝の深さは、場所によって相違する。溝の西端部は幅2m、深さ0.6mを測り、断面U字形を呈す。この溝は、東側へ蛇行して向い、溝幅、深さ共に一定ではなく、途中に3ヶ所の水溜り状の土坑を形成している。水溜り状遺構SX 01からSX 02の間は、

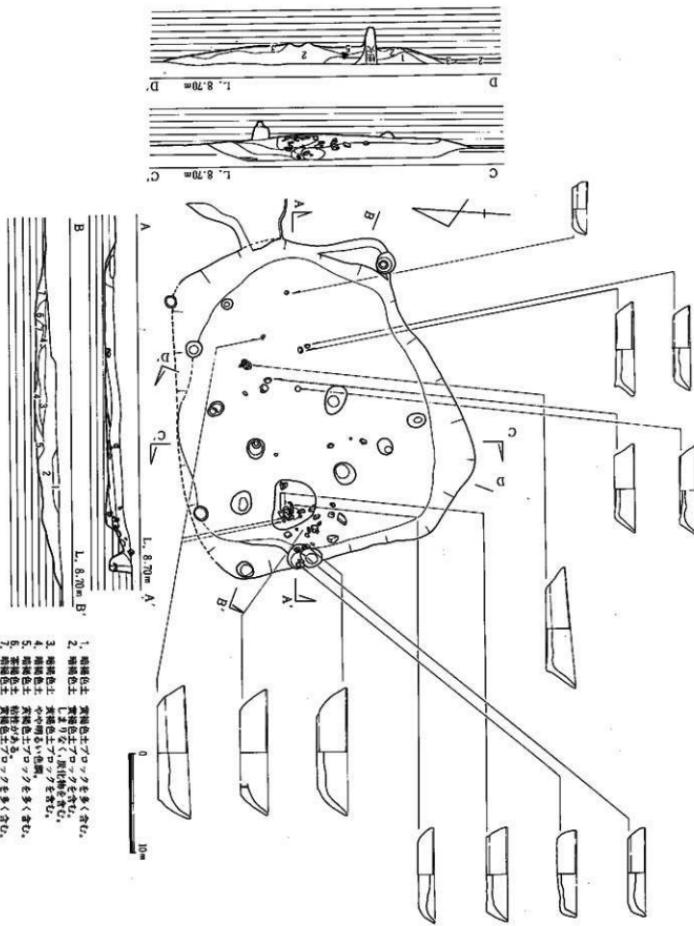
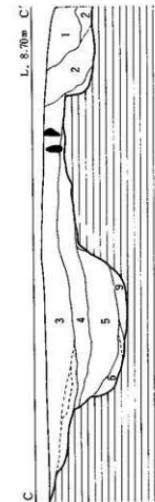
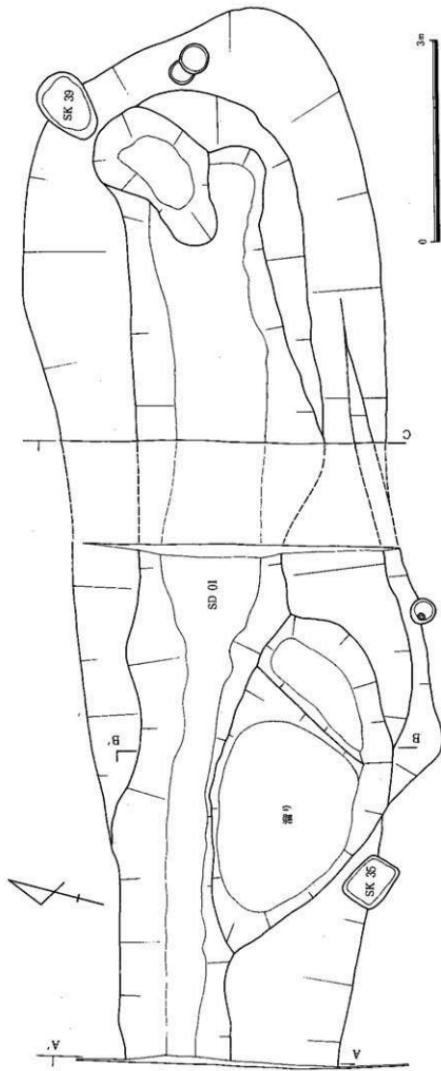


Fig. 29 土 塚 SK 41 (1) / 60. 土塚型 1 (1)



1. 黒褐色土 (漂砾土)
 2. 淡褐色土
 3. 茶褐色土
 4. 黄褐色土
 5. 黑褐色土
 6. 墓狀褐色土
 7. 浅褐色土
 8. 鹿灰褐色土 (漂砾土)
 9. 茶褐色土
 10. 黑褐色土
 11. 黑褐色土
 12. 淡褐色土
 13. 淡茶褐色土
- 斜線部: 植生あり、無植生。点線部: 植生なし、少植生。虚線部: 植生多く、植生良好。白線部: 植生なし。
- : 漂砾。△: 漂砾土。△○: 漂砾土・地盤土を含む。

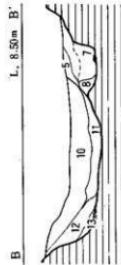
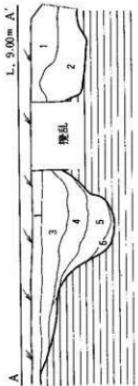


FIG. 30 潟 SD 01 (1/60)

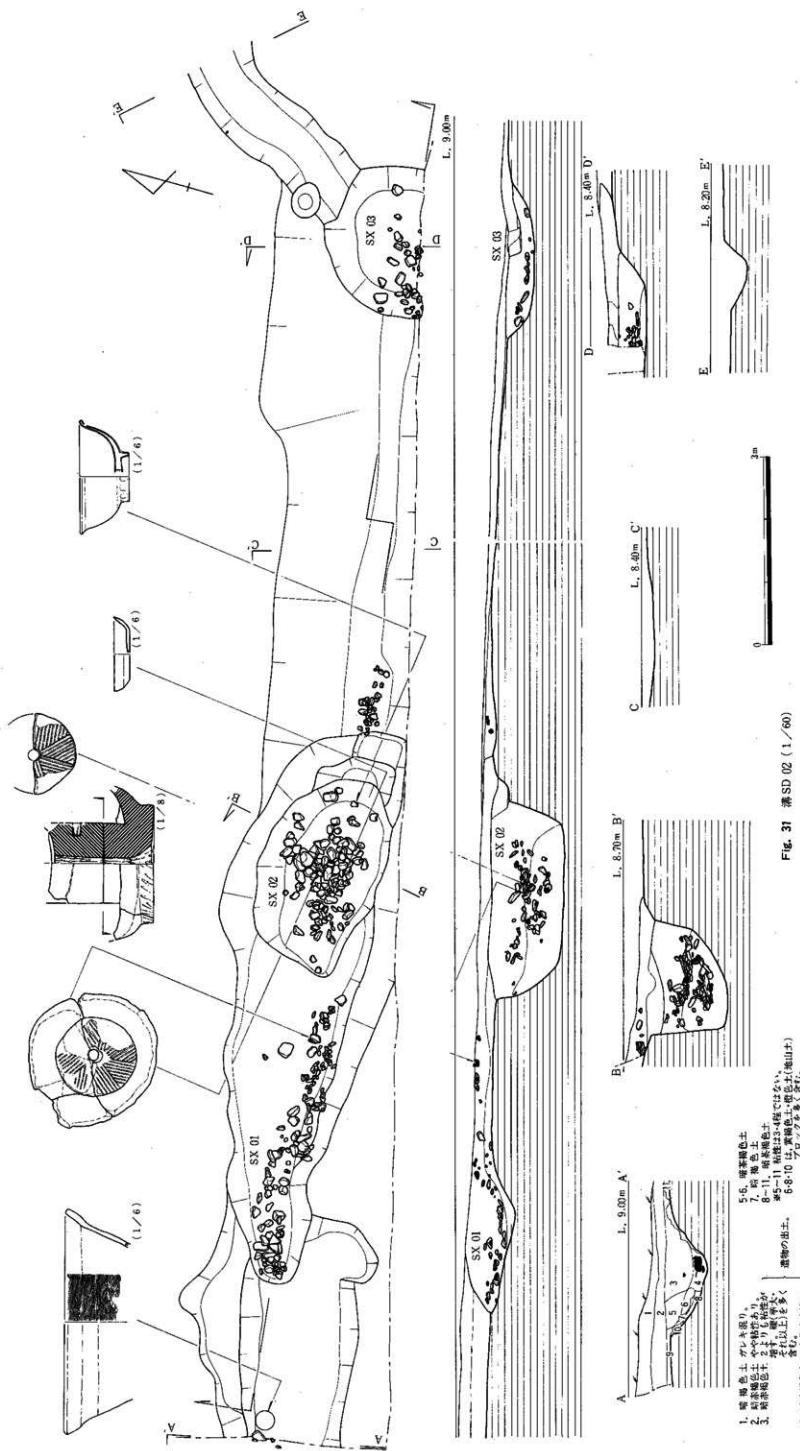


Fig. 31 溝SD 02 (1/60)

溝幅が狭く、深さもないが、この部分は南側肩より礫が2~3段に落ち込んでいる。SX 01, SX 02も同様であるが、この土塙は特に、下底面に礫を充填しており、床を形成している。SX 01の幅1.2m、長さ2.3m、深さ0.4mを、SX 02は幅3.0m、長さ1.8m×深さ1.1mを測る。SX 02は、不整梢円形を呈する。SX 02とSX 03の間は浅いレンズ状を呈し、溝幅も広い。SX 03は円形を呈し、径2.3m、深さ0.5mを測る。底部には礫が検出されるが、SX 02のような石を散詰めた状態ではない。SX 03はこの溝が、東西方向から南北方向へ曲がるコーナーに位置しており、この部分の掘り方は二段掘りとなっている。1段目は幅4m、深さ0.2mを測る浅いレンズ状を呈し、2段目は幅1m、深さ0.4mを測る小溝である。この小溝が、SX 03と南北方向の部分とを接続する。溝の南北方向部分は、長さ17m、最大幅3.5m、最深部0.5mを測る。この溝の幅は北方向に減じ、底部も浅く立ち上り、消滅する。断面では、東肩が二段掘りの浅いU字形を呈する。溝底は一定ではない。南北部分の北側で消滅する部分は、SD 01の袋部分に向っている。SD 02は深さも幅も一定ではなく、かつ、水溜り状遺構SX 01~03を有すなど、排水構的要素からは程遠いと思われる。しかしSX 01~03は、底部の礫の充填の仕方などから、水落ち口部分とも考えられる。溝の覆土は暗茶褐色粘質土であるが、包含層の土層と余り変化はない。又、東側は地山面が急激に傾斜しており、本来、整地地行がなされた上で溝等の施設が設けられたものかもしれない。溝の深さが東方向に減じることは、上記の事を示すのかもしれない。礫群は、南北方向に走る部分では検出されなかった。これらの礫は、水溜り状遺構では底に密着しているが、溝底では浮いた状態で、規則性がない。SX 01~03内の礫は、5cm大から人頭大迄で、又、砥石や石鍋の破損品なども含んでいる。土器類は、わずかに須恵器も含まれるが、多くは土師器、杯、皿、土師質土器の鍋、瓦質土器、輸入陶磁器の青磁・白磁の碗、瓶片、石製品としては、石臼、砥石、石鍋片が出土した。このうち、石臼は、一揃いの上臼と下臼が、近い場所から出土している。上臼はSX 01とSX 02の間で、下臼はSX 02の底から出土している。この溝の年代は中世でも、出土した土師器、杯や、青磁碗から、15C初めの年代を考えている。

SD 03, 04 (Fig. 32, PL. 33) 両者とも鉤形を呈した、浅い小溝状の遺構である。約0.8mの距離をおいて南北方向に平行に走り、北端でSD 03は西方に、SD 04は東方に、ほぼ直角に折れ曲がる。SD 03は全長4m、幅0.2m、深さ0.2mを測り、SD 04は全長6m、幅0.3m、深さ0.2mを測る規模である。形状、配置からみて、建物の隅角に設けられて、雨落ち溝状を呈する。溝が浅いけれども、地山面の傾斜や他の遺構の残存状態からみて、本来の形状を残しているとは思えない。内部に建物の存在を考えたが、明確にし得なかった。覆土は暗茶褐色粘質土で、中世の時期である。SD 03より土師質の土鍋が1点出土した。これはP56出土の鍋と同一個体とみられる。

段落ち状遺構 SD 05 (PL. 34) 発掘区の北・東辺境界の段落ち部分内側で検出した。

この段落ちは現在の土地境界線に沿っており、かつては、畠地の境でもあった。この段落ちは、現在のアセ下に位置しており、深さは北側で0.4m、東側で0.6mを測る。この段落ち下は、浅いレンズ状を呈する溝状となっており、北辺、東辺、及び東辺の南半部分においては、各々段を有し接合しない。特に北東の隅角では高低差を残し、更に凸状の造り出しを挟んで平行に走

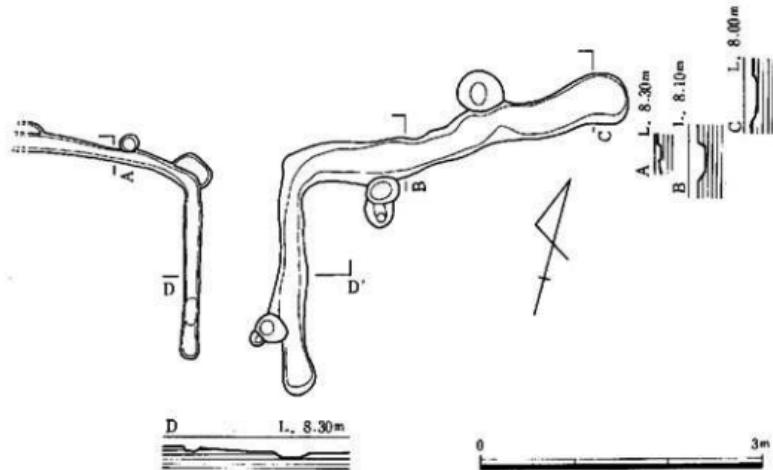


Fig. 32 溝 SD 03, 04 (1/60)

っている。これは開墾時の区境と考えられる。このようにして形成された段落ちが、恐らく、今回の発掘調査地にあたる一段高い畠地からの土砂の押し出しにより次第に埋った結果、現状に至ったものと理解できよう。その埋土は、2層に分けられる。上層は軟らかく、粘性のない黒褐色土である。下層は、やや粘性が強いようである。上層からは現代の廃棄物を含む陶器類が出土し、下層は唐津・古伊万里の碗などの陶器片が出土した。特に古伊万里の碗が多い。このことから、この地域の開墾が、18C前半、或いはそれ以降に行なわれたと考えられる。

掘立柱建物 SB

10棟の掘立柱建物を検出したが全て図上復元である。SB 01建物を除いてすべて南半に集中する。

SB 01 (Fig. 33) 調査区北側に立地する。梁行1間×桁行3間の掘立柱建物で、主軸方位を真東に取る。梁行3.39m、桁行6.69m、各桁間1.79m～2.69mを測る。各柱間の尺度は、一尺約30cmで計った場合、梁行11尺、各桁間6～9尺となる。柱穴径は19cm～49cmを測る。深さは一定ではない。

SB 02 (Fig. 33) 梁行1間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸をN32°Wに置き、梁行3.30m、桁行5.33mを測る。平面形はやや歪む。桁間は1.51m～2.09mを測り、梁行約11尺、桁間5～7尺となる。柱穴径は39cm～90cmと大きく、深さは地表より約60cm～100cmを測る。P3には、厚さ約10cmの板石の根石が残る。

SB 03 (Fig. 34) 梁行1間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸をN72°Eに置き、梁行3.88m、桁行6.41m、桁間は2.01m～2.40mを測る。柱穴径は32cm～70cm、深さは地表より約20cm～90cmを測る。P2、7、8に柱の根締めと思われる草大の転石及び割石を検出した。

SB 04 (Fig. 34) 梁行1間×桁行3間で主軸をN73°Eに置き、SB 03とはほぼ同一方向の掘立柱建物である。梁行3.23m、桁行5.31m、桁間は1.66m～1.96mを測る。柱穴径は22cm～37cmで、深さは標高8.50mより13cm～53cmを測る。P2、3は柱痕と思われ、径は8cm～12cmを測る。

SB 05 (Fig. 35) 梁行1間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸をN64°E方向に置き、梁行4.44m、桁行5.52m、桁間は1.52m～2.18mを測り、梁行15尺、桁間5～7尺となる。柱穴径は32cm～61cm、深さは地表より10cm～54cmを測る。P3に角礫の根締め石が検出された。

SB 06 (Fig. 35) 梁行1間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸方向をN21°Wに置き、SB 02とはほぼ同一方向である。梁行4.32m、桁行5.33m、桁間は2.58m～2.74mを測り、梁行14尺、桁間約9尺となる。柱穴径は28cm～43cmを、深さは地表より40cm～80cmを測る。柱径は柱痕から推測し、14cm前後である。SB 09と柱穴が2ヶ所切り合う。

SB 07 (Fig. 36) 梁行1間×桁行4間の掘立柱建物である。主軸をN83°Eに置き、SB 01とはほぼ同一方向である。梁行4.00m、桁行7.93m、梁間は1.77m～2.06m、桁間は1.72m～2.19mを測り、梁間6～7尺、桁間約6～7尺となる。柱穴径は24～69cmで、深さは標高8.50mより39cm～103cmを測る。柱径は柱痕から推測し、8cm～12cmを測る。

SB 08 (Fig. 36) 梁行2間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸をN88°Eに置き、SB 01とはほぼ同一方向である。南側に1間の庇が付く。梁行は底部を入れて5.60m、桁行は5.65mとなり、梁行1.78m～2.04m、桁行間1.71m～1.98mを測る。柱穴径は30cm～77cmを測り、深さは標高8.50mより36cm～77cmを測る。一部の柱穴には柱痕及び根石が残る。SB 10とP5、7が切り合う。

SB 09 (Fig. 37) 梁行1間×桁行2間の掘立柱建物である。主軸はN30°W方向に置き、梁行4.05m、桁行5.25m、桁間は2.44m～2.91mを測る。柱穴径は30cm～42cmを、深さは標高8.50mより34cm～42cmを測る。P1には厚さ6cmの板石状の礫石が残る。

SB 10 (Fig. 37) 梁行1間×桁行3間の掘立柱建物である。主軸はN80°W方向に置き、梁行3.70m、桁行7.11m、梁間は1.75m、桁間は2.18m～2.56mを測る。柱穴径は21cm～65cmを、深さは地表より30cm～66cmを測る。P1、2は7cmと浅い。

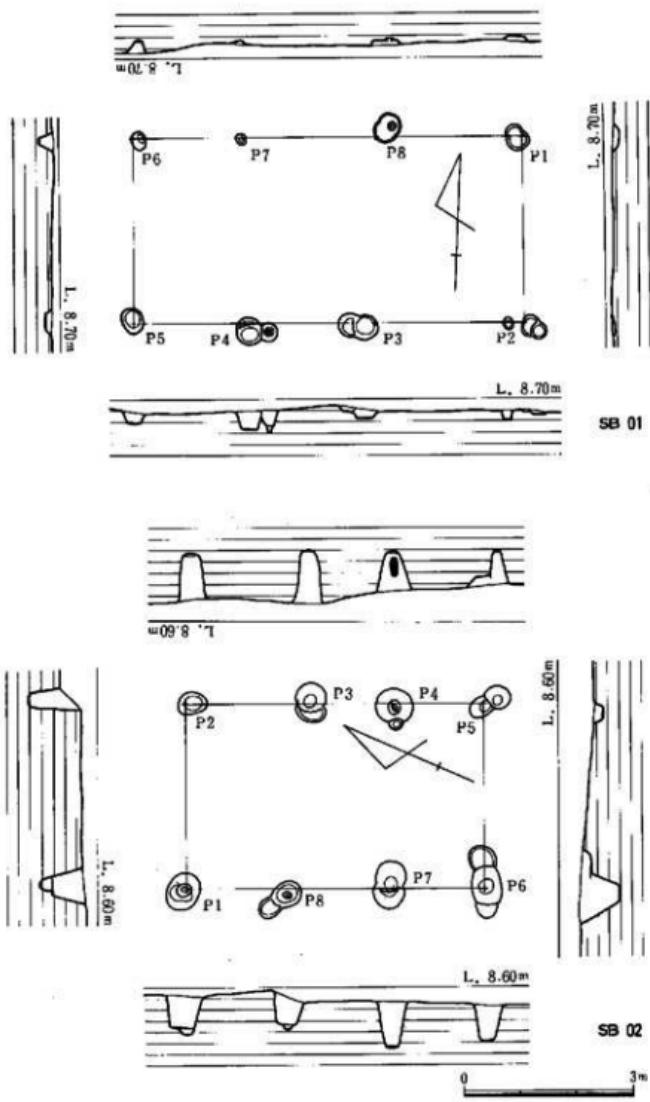


Fig. 33 挖立柱建物 SB 01, 02 (1/100)

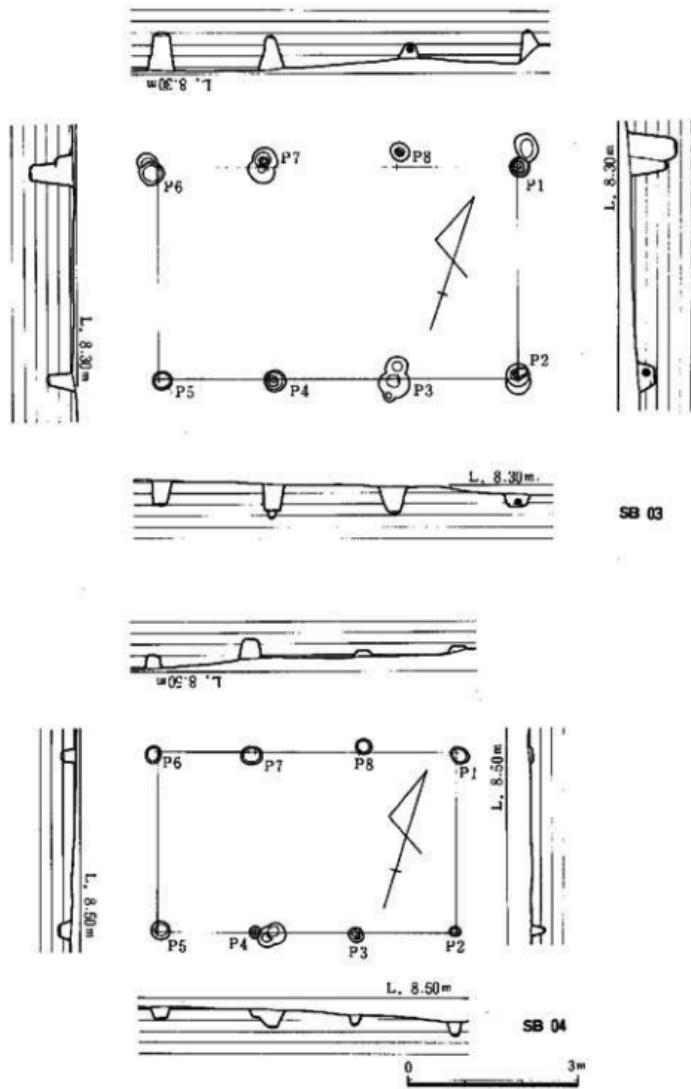


Fig. 34 挖立柱建物 SB 03, 04 (1/100)

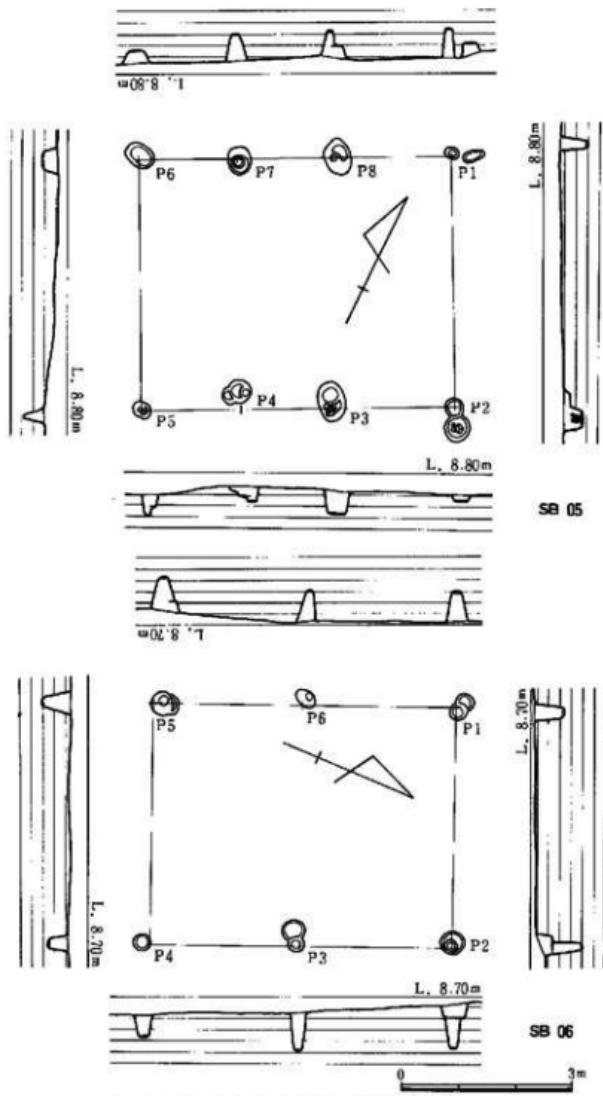


Fig. 35 挑立柱建物 SB 05, 06 (1/100)

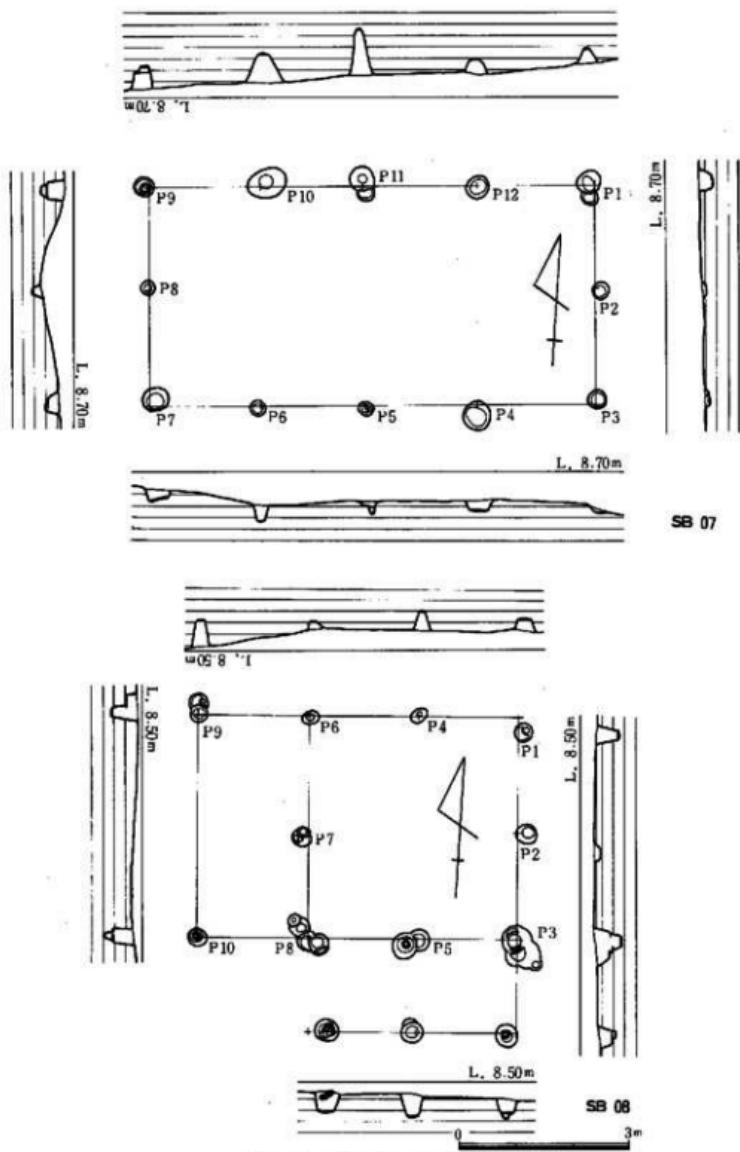


Fig. 36 SB 07, 08 (1 / 100)

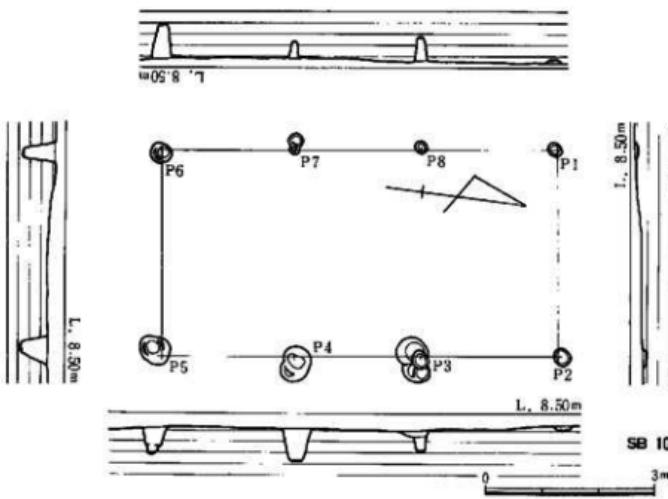
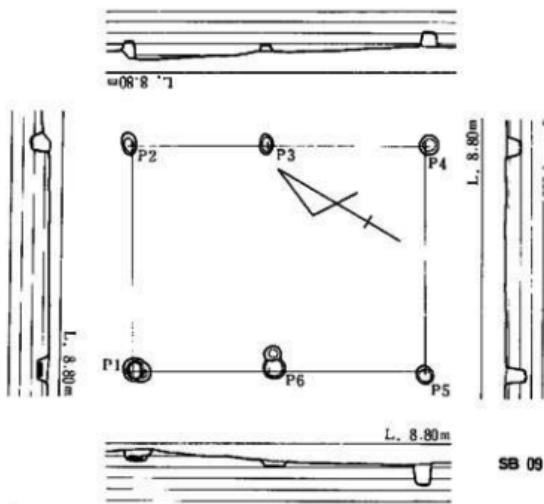


Fig. 37 捏立柱建物 SB 09, 10 (1 / 100)

以上の掘立柱建物は、柱穴内より土師器杯、皿片を出土している。杯、皿は糸切り底である。又、SB 03-P8からは青磁盤の破片が出土し、SB 07-P11からは土師質の土鍋が出土している。この土鍋はSD 04出土の土鍋と換合するものである。

小 結

第II章で述べたとおり、当該地は北西方向へ伸びた標高8m~14mを測る舌状台地の東斜面に位置している。当該地の標高は9m前後を測り、平坦面を構成しているが南側の市営住宅との間は約2mを測る段差がある。発掘調査後にこの段落ち部分の擁壁工事が行われたため立会調査を行ったが、この部分は1~1.5mに及ぶローム層で形成されており、調査区南側の段上部分が盛土で形成されたものでないことが判明した。検出した遺構は弥生時代前期の土塙2、前期窯棺墓1基、同中期土塙3、中世の土塙29、同じく中世の溝状遺構4、掘立柱建物10棟である。縄文時代、古墳時代~平安時代の遺物は極端に少なく、遺構は検出されなかった。18C代の遺物はいずれも開墾時の地割り溝と思われる遺構より出土しており、直接台地上の遺構に関わるものではない。この台地に於いて集落が営まれた時期は弥生時代と中世の2期に大きく分けられる。尚、土師器は全て糸切り底で、ヘラ切り底は含まれない。厳密に言えば、この遺跡は弥生時代前期~中期迄のI期と、中世の13C~15C迄のII期に分けて考えられる。

第I期は前期前半代、後半代、中期前半代の3小期に分けられる。第1小期は土塙SK 05を代表とするものでSK 03も同時期に属するものと思われる。調査区の北西部に位置し、長軸はほぼ同一方向である。SK 03からは炭化米が出土している。SK 05出土の土器は口縁を小さく外反させた小型壺の破片で黒褐色を呈し、外面ヘラ磨きを施す。第2小期は窯棺墓に位置づけられ、前期後半末に至る時期である。窯棺墓は調査区北東部に位置している。この期の窯棺は成人棺として完成された初現の棺であり、既に一時期前には群集することが知られているので、他にも存在した可能性がある。SD 01の底から前期~中期前半の窯棺片がまとまって出土しているので前期~中期に至る窯棺群が存在したことが明確となった。第3小期は土塙SK 02を代表とするもので、隅丸長方形を呈した土塙内部には口縁が逆L字形を呈し、刺顔形に開いた小型の壺と、頸部が内傾し、小さく外反した口縁をもった前期の壺の要素を充分に残した小型の壺が置かれていた。このSK 02の覆土から炭化米が多量に出土している。SK 02には溝SD 01出土の窯棺片が伴う。東端部分で検出した円形住居跡は時期が比定できないが、SK 02に伴う可能性がある。

以上その他、第I期には土塙SK 07、15も含まれる。第I期の遺構はSK 05を除いて、調査区北側や東側縁辺に偏在しており台地中央には位置していない。土塙、窯棺墓や住居跡の残存状態からみて、第I期以降に大規模な削平があったことが考えられる。

第II期には土塙、溝状遺構、掘立柱建物が検出されるが、出土遺物の検討を行ってい

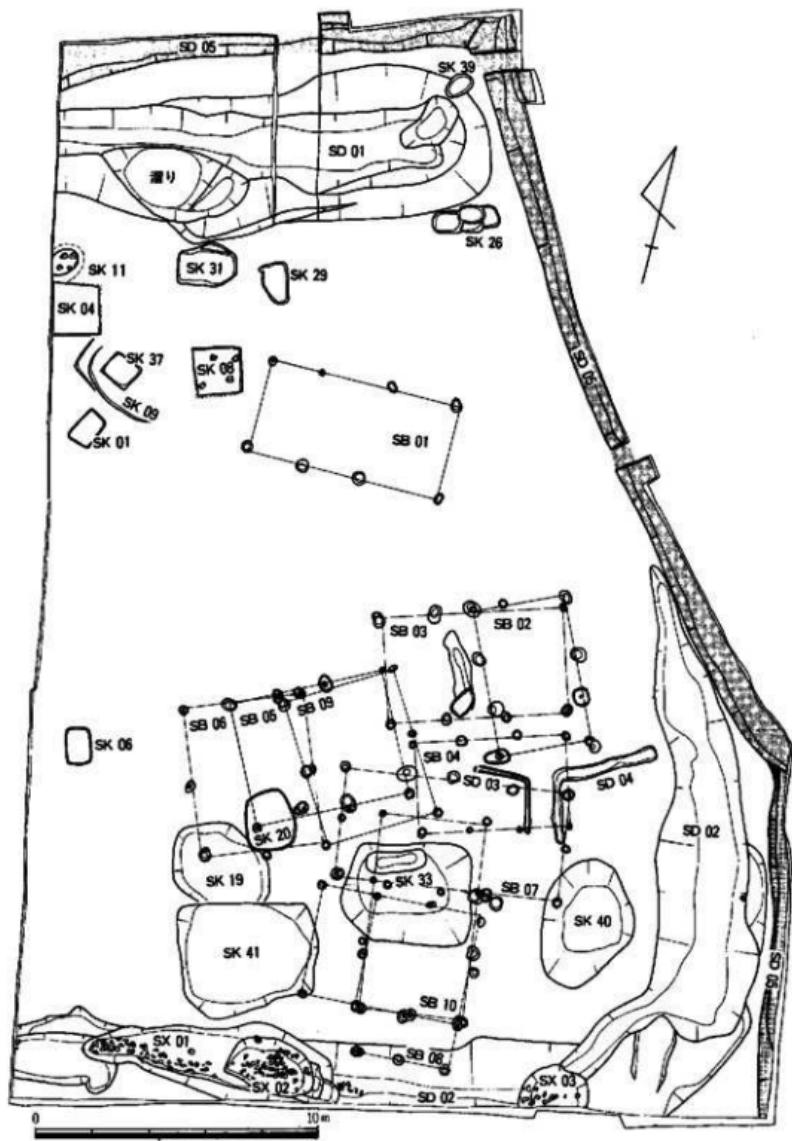


Fig. 38 中世遺構配置図 (1 / 200)

ない現時点では大まかに 2 小期に区分できる。第 1 小期は土塁 SK 11 を代表するもので、SK 11 底部からは等間隔に置いた 4 個の礫とともに四耳壺が出土した。この四耳壺は 12C~13C に位置づけられている。SK 04 は SK 11 と切合うが SK 04 の覆土が SK 11 内に流入するなど、時間的に余り差が無いものと考えられる。又、SK 08 は SK 04 と同規模、同形態を呈しており、同時期の所産である。SK 04, 08 の覆土は 2 層に明確に分離でき、1 層からのみ炭化米を検出した。SK 08 は SK 11 同様に配石がある。これらに伴う掘立柱建物については現段階では不明である。第 2 小期は SK 41, 溝 SD 01, SD 02 を含めた時期である。SD 02 内 SX 02, SX 03 から 14C 末~15C 初頭の青磁碗や、15C 代前半の明の基筋底の皿^{註 1}が出土している。SD 41 では土師器の杯、皿の良好なセットが検出された。杯は 3 類に分類できる。皿は 3~4 の分類が可能である。杯の 1 類は体部が丸味をもち、口径 12cm~13cm、器高約 2.5cm、底径約 8cm を測るもの、2 類は 1 類と同じ器型で口径が 13cm~14cm、器高約 3cm を測るもの、3 類は口径 13cm、器高 3cm 前後を測り、体部が大きく開く器型のものが伴う。これらは共伴する陶器からみて 15C 代に属するものと考えられる。SD 01 は調査区北端を東西に伸びた溝で、SD 02 は調査区南端から東側縁辺を鉤状に伸びた溝である。いずれも同時期の所産と思われ、南側の SX 02 と SX 03 の間に 1ヶ所、SD 01 と SD 02 の間に 1ヶ所の陸橋を挟んで、台地を方形状に区画する溝である。SD 01 は南壁に溜り状の突き出し部分をもち、SD 02 は、SX 01~03 のような不定形プランで、礫を充填した土塁をもっている。溝の形態は不定形であり、水を流す溝としてよりも区画する溝としての機能があったものと思われる。こうした溝で区画した中世の集落は近年調査例が増加しており、蒲田遺跡、井手ノ原遺跡^{註 2}の例がある。井手ノ原遺跡では溝で方形区画された内側に掘立柱建物などの施設が検出されている。SD 01, 02 に伴う土塁は SK 41, SK 33, SK 19, SK 23 などである。SK 41, SK 33 は隅丸長方形を呈し、断面は皿状である。こうした土塁は五十川高木遺跡^{註 3}で検出されている。覆屋をもっていた可能性もある。

以上のことから、II 期の第 1 小期の遺構は土塁を主体とし、いずれも調査区西北端に位置しているが、第 2 小期は方形区画をもった集落が営まれ、それらの遺構は南側に偏在している。掘立柱建物の時期については今後の課題であるが、SB 03, 04 は東西に、SB 02, 06 も南北に同一方向の建物である。

調査区南側の段落ちの形成については、SD 02 が崖下を巡っていることや、南側に 15C 代の遺構を多く検出したことから、少なくとも 15C 代には地下げ作業が終了していたものと考えたい。今回の報告では遺物の整理が不充分であるため、次の機会に再度資料の検討と報告を行いたい。

* 註 1. 福岡市教育委員会『蒲田遺跡』九州歴史遺産文化財調査報告 1975

註 2. 福岡県教育委員会『井手ノ原遺跡』山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第 2 集 所収 1976

註 3. 福岡県教育委員会『五十川高木遺跡』山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 所収 1975

土地番号	平面形状	断面形状	規模 長さ×幅×深さ	方向	出土遺物	備考	
SK 1	不整の長方形	低い逆台形	123×82×25	N26°E	弥生式土器(縦), 土師器(片), 青磁(筒)	炭化米出土。	
②	隅丸長方形	#	133×108×35	N13°E	弥生式土器(直・充て), 刺身盤	炭化米出土。	
③	長方形	#	163×51×18	N72°W	弥生式土器(縦)	炭化米出土。	
4	方	形台	形	197×156×85	N15°W	弥生式土器(片), 瓦底器(片), 土師器(杯・瓶), 土師質土器(筒), 青磁(筒), 銅津, 不斬の石製品, 鉄石	炭化米出土。SK 11に切られる。形状・規模とともにSK 8に似る。
⑤	不整の隅丸長方形	低い逆台形	173×81×23	N69°W	弥生式土器(片)	底にビット?	
6	隅丸長方形	#	128×79×11	N18°W	土師器(杯・瓶), 瓦器(片)		
⑦	不整の隅丸方形	(深い皿状)	104×96×25	N53°W	弥生式土器(縦・直)		
8	不整の長方形	台	形	168×151×80	N18°E	上層: 弥生式土器(片), 瓦底器(片), 土師器(杯・瓶), 瓦質土器(縦), 青磁(筒), 銅津, 不斬の石製品, 鉄石 下層: 弥生式土器(片), 土師器(片), 瓦質土器(片), 刺身盤	炭化米出土。 底近くに配石。
9	?	?	?	N64°W	弥生式土器(片), 土師器(片), 刺身盤	炭化米出土。	
10	(隅丸長方形)	(低い逆台形)	?	N44°W	なし		
11	不整の隅丸長方形	(袋状)	開口前75×70後55 (底面)130×125(69)	N28°E	泥底器(高台院), 土師器(杯・直), 土師質土器(筒), 青磁(筒), 刺身盤		
13	隅丸長方形	(逆台形)	110×59×33	N72°E	なし		
14	方	形台	73×73×13	N30°W	なし		
15	長方形	形隅丸の逆台形	150×69×32	N27°E	弥生式土器(片), 錫石, 刺身盤		
16	楕円形	(低い逆台形)	(100)×56×19	N16°W	土師器(瓶), 刺身盤		
19	不整形	浅い皿状	346×279×16	N15°W	弥生式土器(縦), 瓦底器(片), 土師器(杯・直), 土師質土器(土塚), 瓦質土器(押棒), 青磁(筒)	SK 41と接する。	
20	楕円形	低い逆台形	215×176×19	N18°W	土師器(杯・直)		
21	不整楕円形	深い皿状	289×58×22	N28°W	土師器(直), 土師質土器(土塚)	SK 22に切られる。	
22	隅丸長方形	逆台形	93×55×27	N32°E	土師器(片), 青磁(瓶)		
23	(隅丸長方形)	低い逆台形	(82×32×21)	N21°W	なし		
25	隅丸長方形	深い皿状	153×95×36	N77°E	弥生式土器(縦), 瓦底器(片), 土師器(直), 銅津, 刺身盤		
26	—	—	(深き四から?) (16, 28, ?)	N74°E	弥生式土器(筒), 瓦底器(直), 土師器(直), 刺身盤	3基が複合?	
27	隅丸長方形	低い逆台形	(110)×95×20	N75°E	なし	炭化米出土。	
28	#	#	109×80×10	N12°W	土師器(片), 土師器(直), 枝状片瓦(右肩), 刺身盤		
29	#	逆台形	137×68×55	N21°W	土師器(杯・直), 刺身盤	SK 30を切る。	
30	隅丸長方形	#	143×(120)×43	N22°E	弥生式土器(直・縦), 土師器(杯), 刺身盤		
31	不整の長方形	(逆台形)	208×122×31 (154)	N76°E	弥生式土器(縦), 瓦底器(杯直・杯身), 土師器(杯・直), 土師質土器(土塚), 瓦質土器(直・縦), 青磁(筒), 銅津, 瓦底質土器(直), 刺身盤		
33	不整形	浅い皿状	437×347×16	N20°W	瓦底器(片), 土師器(片)		
34	楕円形	? 低い逆台形	(83)×(30)×16	N35°W	土師器(杯), 刺身盤, 刺身盤		
35	不整の長方形	逆台形	80×60×31	N62°W	土師器(片), 刺身盤		
37	#	#	107×96×29	N64°W	弥生式土器(直), 土師器(杯・直), 刺身盤		
39	楕円形	皿状	100×71×16	N26°E	弥生式土器(縦?), 土師器?	土器窯?	
40	#	浅い皿状	466×328×7	N6°W	弥生式土器(筒), 瓦底器(片), 土師器(直)		
41	不整の長方形	#	481×(440)×22	N84°E	土師器(杯・直), 土師質土器(土塚・直), 瓦質土器(直・縦), 青磁(筒・直), 銅津, 土師, 刺身盤		

表 1. 土 坑 観 察 表

○印は、弥生時代。

()は現存値。

	原木	单根	方材	杆材	行材	锯材	单根	方材	杆材	行材	锯材
	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)
P1 P2	3.3	P1 P8	1.8	P1	1.8	P1	1.8	P1	1.8	P1	1.8
P8 P9	3.4	P8 P7	1.4	P8	1.4	P8	1.4	P8	1.4	P8	1.4
P7 P8	3.1	P7 P6	1.5	P7	1.5	P7	1.5	P7	1.5	P7	1.5
P6 P5	3.2	P6 P4	2.9	P6	2.9	P6	2.9	P6	2.9	P6	2.9
P4 P3	—	P4 P3	1.9	P4	1.9	P4	1.9	P4	1.9	P4	1.9
P3 P2	—	P3 P2	1.5	P3	1.5	P3	1.5	P3	1.5	P3	1.5
P2 P1	—	P2 P1	1.5	P2	1.5	P2	1.5	P2	1.5	P2	1.5
平均	360.3	平均	176	平均	176	平均	176	平均	176	平均	176
			3.3		3.3		3.3		3.3		3.3
			平均		平均		平均		平均		平均

2 捷文竹植物 SB 02 計測表

	断面 (mm)	断面 (mm)	断面 (mm)	断面 (mm)	P	断面 (mm)	断面 (mm)	断面 (mm)
P1/P2	3.31	P1/P8	2.22		1	1.6	4.6	3.9
P3/P4	3.58	P8/P7	2.69		2	2.7	2.6	
P7/P4	3.47	P7/P6	2.59		3	1.4	4.6	4.4
P6/P5	3.21	P2/P8	2.53		4	33.7	6.6	4.5
		P3/P4	2.08		5	4.5	3.6	
		P4/P5	2.07		6	2.6	3.2	
					7	23.5	1.9	1.8
					8	2.0	4.9	4.1
平均	339.3	平均	223	66.9	平均	185.4	38.8	34.6

1 摺立柱植物 SB 01 計測表

	總面積 (m ²)	面積 (m ²)				
P1 P2	3.19	P1 P8	1.71	P1	1	43.1
P8 P3	3.8	P8 P7	1.96	P4	2	3.2
P7 P4	3.1	P7 P6	1.74	P6	68.4	3.0
P6 P5	3.16	P2 P3	1.78	P5	3	2.2
		P2 P4	1.9	P3	49.3	2.6
		P3 P4	1.76	P4	35.1	2.1
		P4 P5	1.66	P5	22.1	
平均	3.23	平均	176.8	530.5	平均	45.1
					20.1	27.5

4 標文註解 SB 04 計測表

卷	闊	葉片闊	柄	軸	葉	圓	側	柄打開	P	深	舌	長	寬	短	延
(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)	(cm)
P1 P2	4.5	2.2	P1 P8	2.2					1	52.6	3.6	2.1			
P8 P3	4.5	5.7	P8 P7	1.7	5.5	0			2	19.6	3.2	3.1			
P7 P4	4.1	5.3	P7 P6	1.6	5.3	0			3	37.9	5.6	4.9			
P6 P5	4.5	5.4	P2 P3	2.8	5.4	0			4	23.4	3.8	5.5			
			P3 P4	1.5	5.5	0			5	47.3	3.2	2.8			
			P4 P5	1.8	5.4	0			6	1.3	5.1	4.1			
									7	41.1	5.0	3.9			
平均	4.4		平均	1.8	5.2	平均			8	35.4	4.8	3.6			

5 烟火植物 SB 95 计划书

单 位	量 称	量 表	行 断 面	P	横 向		单 位	量 称
					(cm)	(cm)		
P1 P2	4.5 2	—	P1 P8	2.2	1	0.6	3.6	2.1
P2 P3	5.7	—	P8 P7	1.0	5.5	19.6	3.2	3.1
P7 P4	4.1 3	—	P7 P6	1.6	3	7.9	5.8	—
P6 P5	4.5 4	—	P2 P3	2.8	4	23.4	38.5	3.6
—	—	—	P4 P5	1.52	5.54	4.7	3.2	2.8
—	—	—	P4 P5	1.84	6	1.3	5.1	4.1
—	—	—	—	—	7	41.1	5.0	3.9
平均	4.4 4	平均	1.84	5.52	平均	35.4	44.8	3.6

5 烟火植物 SB 95 计划书

P	D ₀ (mm)	切削 速度 (m/min)	进给 量 (mm/rev)	切削 厚度 (mm)	切削力 (N)		功率 (W)	温度 (℃)
					轴向 力F _A	径向 力F _R		
P12.2	3.73	P1 P6 2.1	1	72.6	3.4	3.3	
P7.8	4.08	P8 P7 2.0	65.2	68.6	5.4	4.5	
P7.4	3.95	P7 P6 2.0	51.1	66.6	7.0	5.0	
P6.5	3.74	P2 P3 2.0	4	75.6	4.0	3.4	
			P3 P6 2.1	6.9	50.5	3.2	3.0	
			P4 P6 2.1	76.6	4.0	3.8		
			P5 P6 2.1	7	31.7	6.4	4.2	
平均	387.5	平均	2.14	660.5	平均	63.9	6	37.5

3 柱立柱標物 SB 03 計測表

P6P3	4.00	P6P5	2.67	[5]4	2	—
P5P4	4.12	P2P3	2.44	3	25.6	3.7
		P3P4	2.91	5.35	3	28.6
				40.9	3.4	3.2
				5	55.6	3.0
				6	78.5	4.0
平均	404.7	平均	262.3	230.5	31.7	36.2
					2.8	

標	標	標	標	標	標	標	標	標	標
標	標	標	標	標	標	標	標	標	標
P122 P123 P124 P125 P126 P127 P128 P98/P100	1.76 3.7 4.06 4.06 2.04 2.04 2.00 3.97	— 1.6 1.88 1.88 1.94 1.94 2.07 1.94	— 1.6 1.88 1.88 1.94 1.94 2.07 1.94	P1 P4 P4 P4 P4 P4 P4 P9/P10	1.6 1.6 1.88 1.88 1.94 1.94 2.07 1.94	P P P P P P P P	1.6 1.6 1.88 1.88 1.94 1.94 2.07 1.94	1.6 1.6 1.88 1.88 1.94 1.94 2.07 1.94	1.6 1.6 1.88 1.88 1.94 1.94 2.07 1.94
平均	194.3	398.3	397.3	平均	189.0	400.3	平均	190.0	398.6

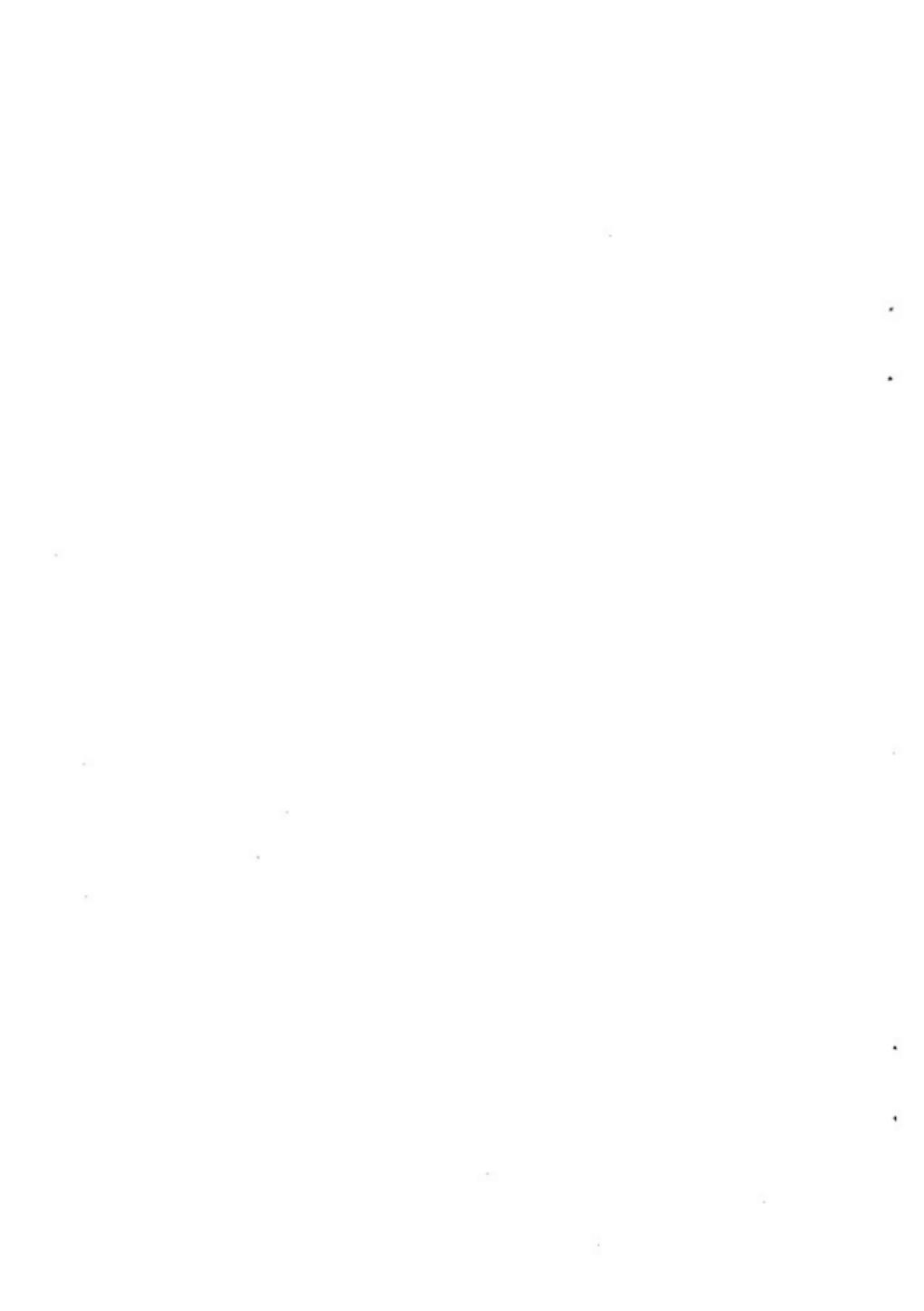
8 振文社總目 SB 08 計識

9. 長足鱗鮋 SB 69 計測表						
	尾(cm)	頭(cm)	眼(cm)	胸鰭(cm)	P (cm)	長(cm)
P1/P2	3.71	P1/P6	2.8		1	1.4
P8/P3	3.82	P7/P6	2.3	5.69	2	31.1
P6/P5	3.49	P2/P3	2.1	5.69	3	68.2
	P3/P4	2.8		7.05	4	64
	P4/P5	2.6		7.05	5	76.6
				7.05	6	56
				7.05	7	73.2
平均	36.9	平均	25.6	71.0	平均	57.9
						33.9

8 振文社總目 SB 08 計識

7 摺紙藝術 SB 02 2001

図 版





有田：小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



(1)遺跡全景（南から）



(2)調査区北半部分（南から）



(1)調査区南半部分（西から）



(2)調査区南半東部分



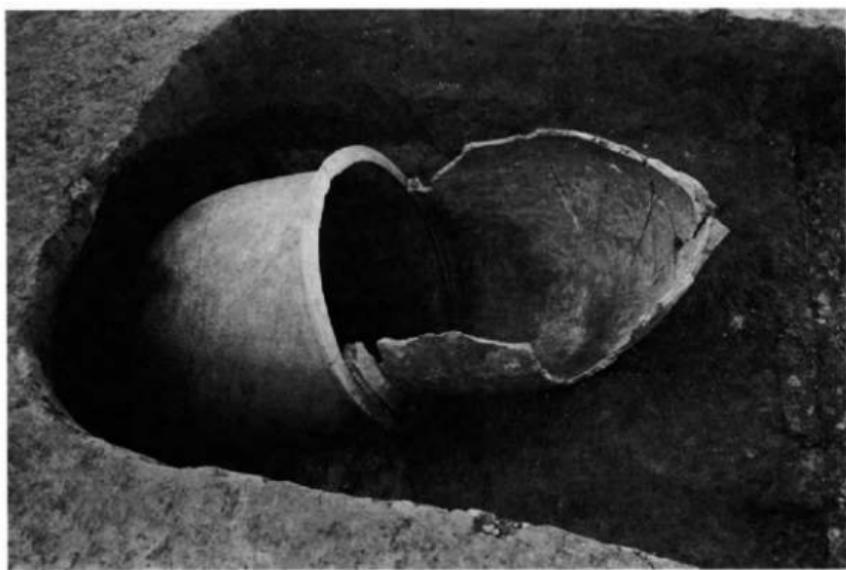
(1)住居跡 SI 01, 02



(2)柱穴集中部



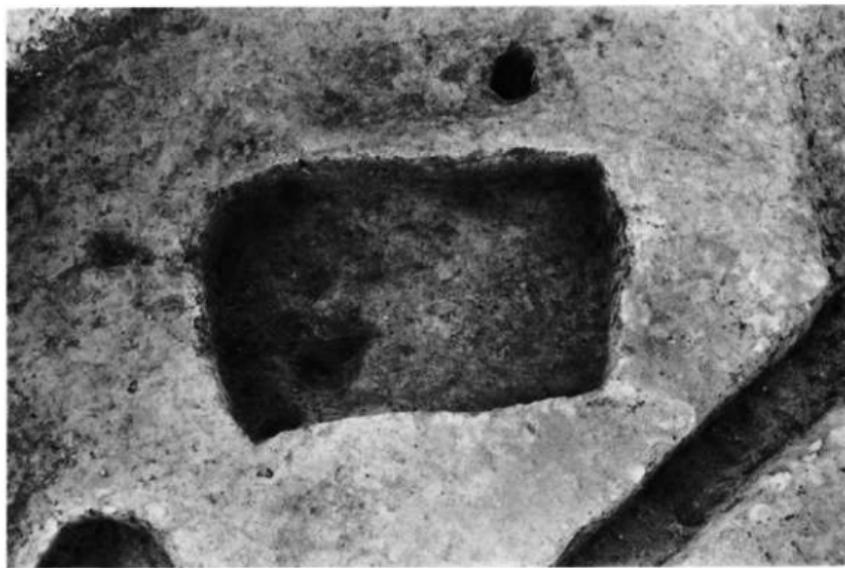
(1)腰棺墓



(2)同拵大



(1)土堆集中部



(2)土堆 SK 01



(1) 土址 SK 02



(2) 同 土器出土状态



(1) 土塙 SK 03



(1) 同 04

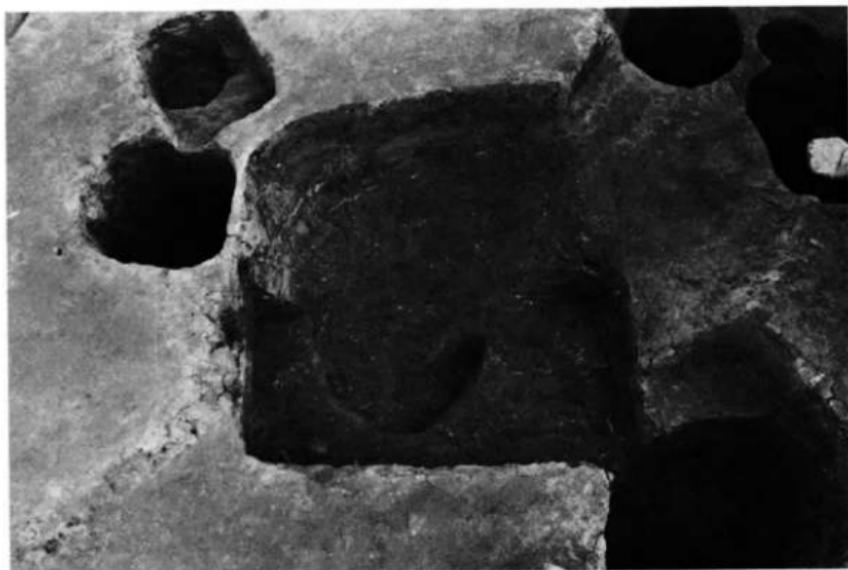
PL. 10



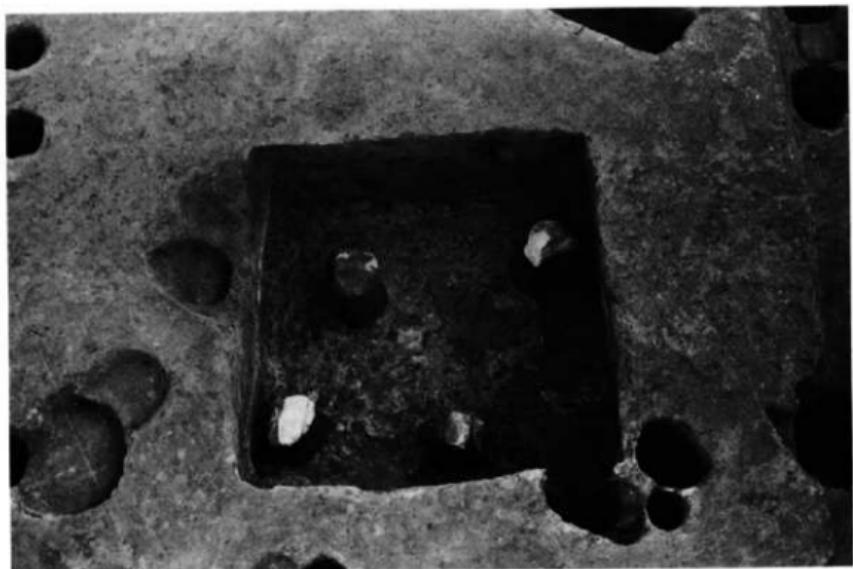
(1) 土块 SK 05



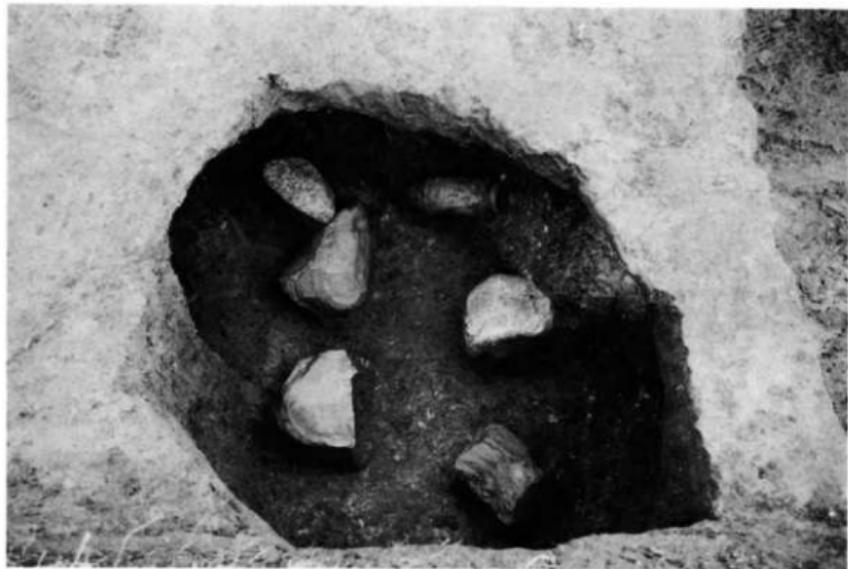
(2) 同 06



(1) 土坡 SK 07



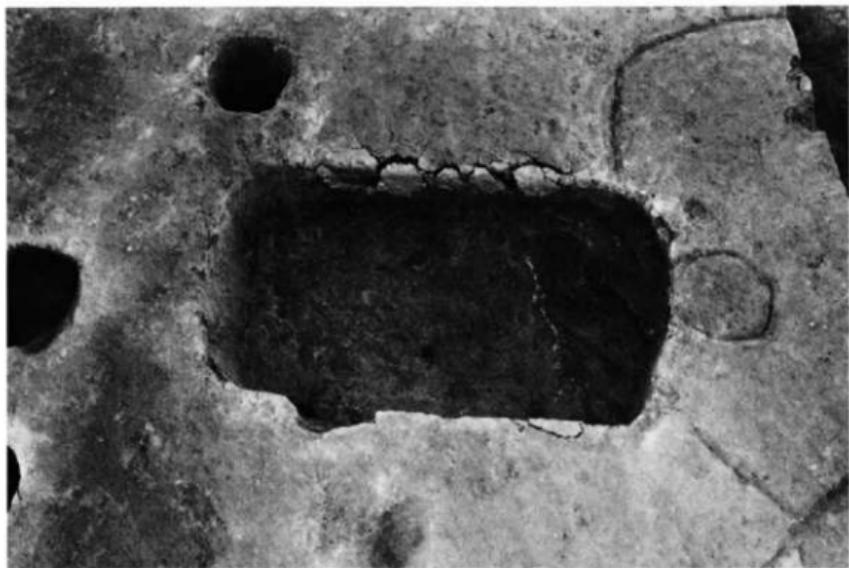
(2) 同 08



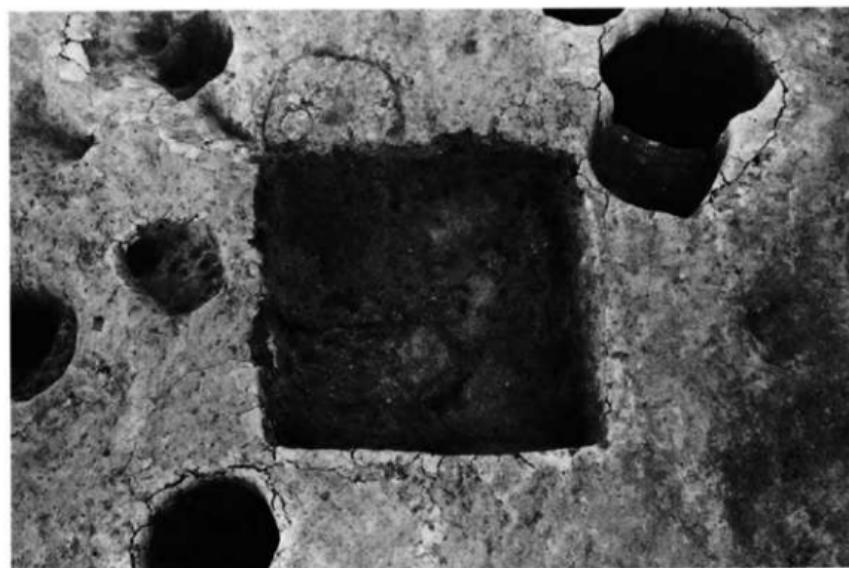
(1) 土坑 SK II



(2) 同 四耳壺出土狀態



(1) 土埴 SK 13



(2) 同 14



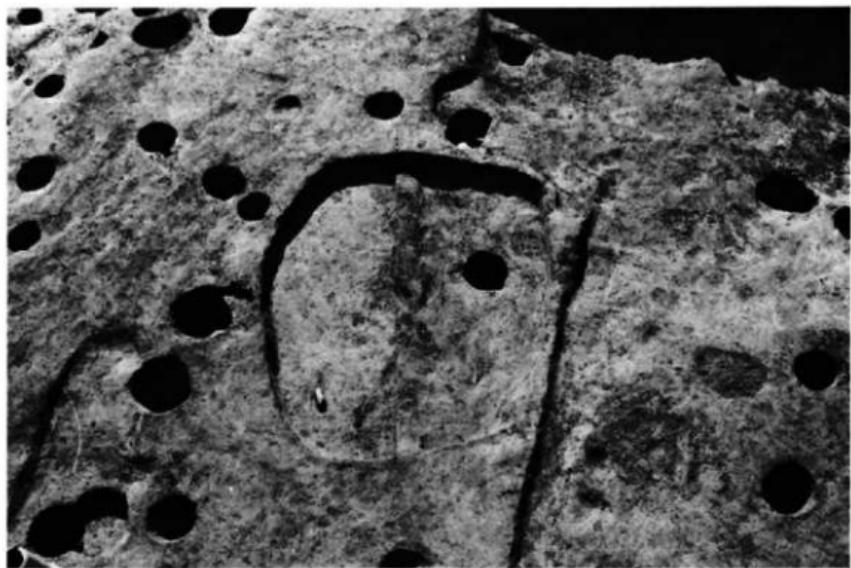
(1) 土址 SK 15



(2) 同 16



(1) 土坡 SK 19



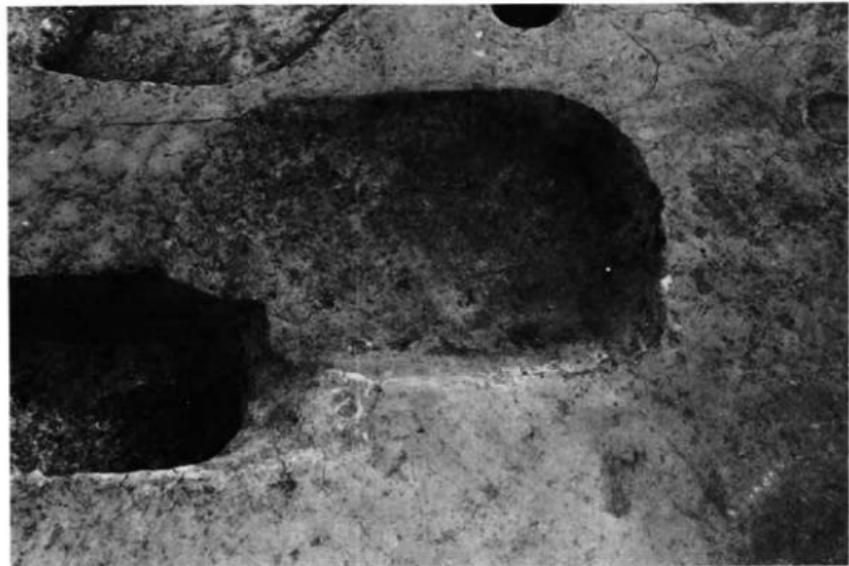
(2) 同 20



(1)裝棺墓，土坡 SK 25·26遠景



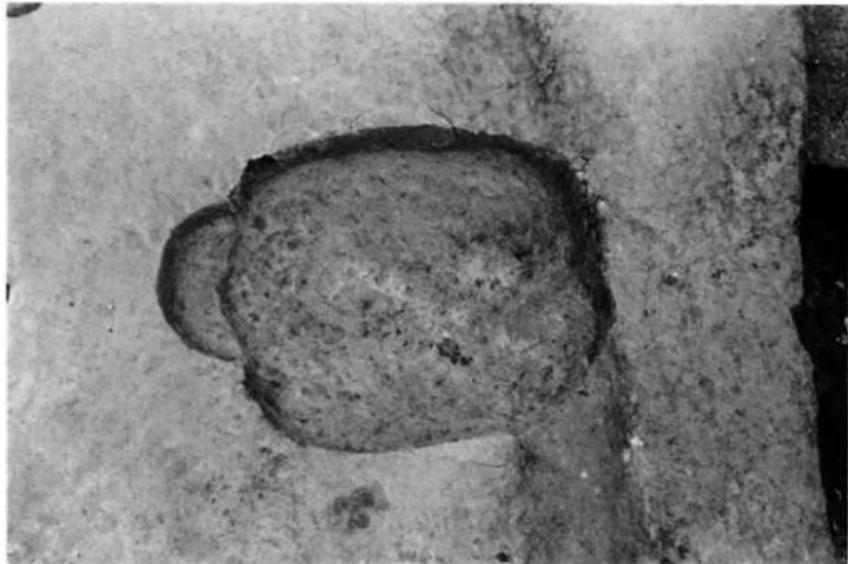
(2)土坡 SK 25



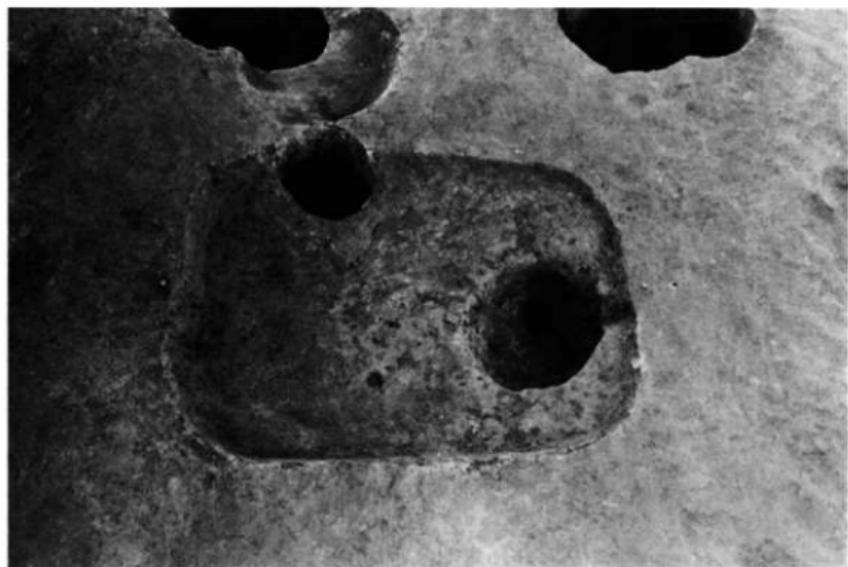
(1) 土址 SK 26 部分



(2) 同



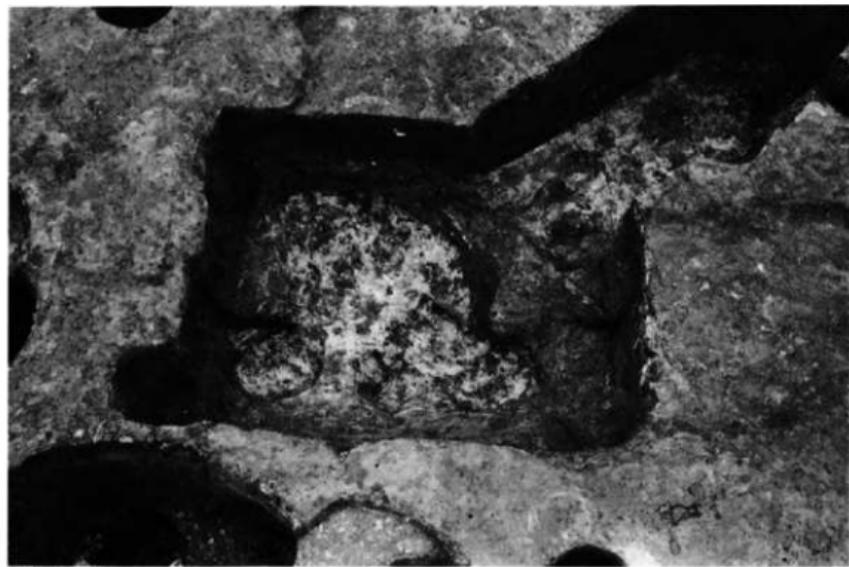
(1) 土城 SK 27



(2) 同 28



(1) 土塙 SK 29



(2) 同 30



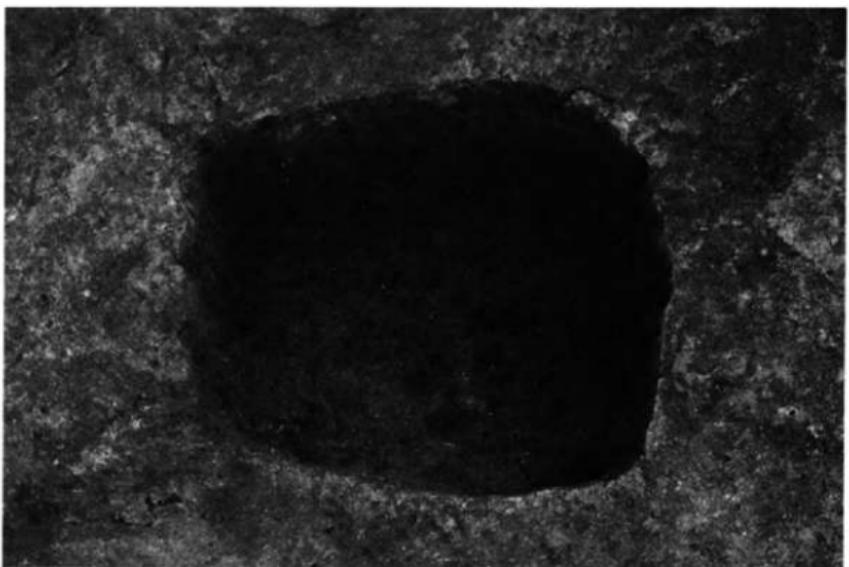
(1) 土壌 SK 31



(2) 同 33



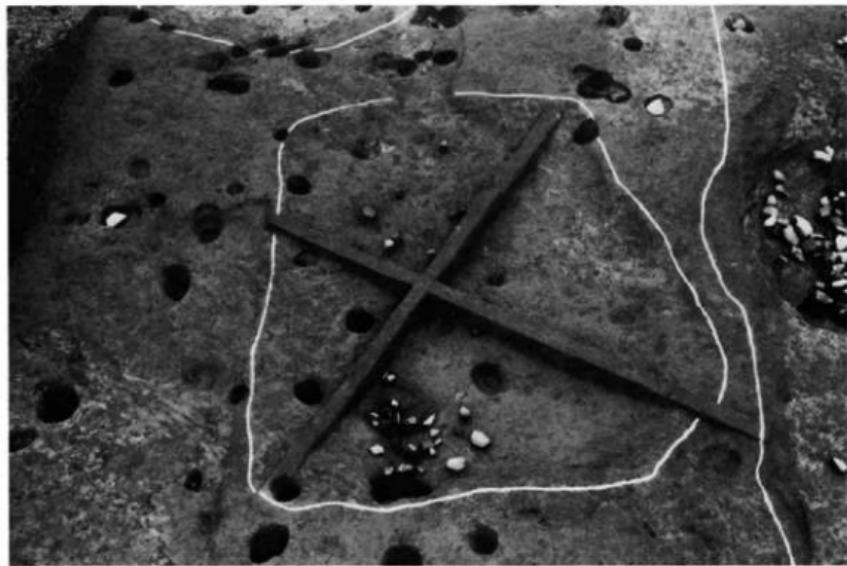
(1) 土堆 SK 34



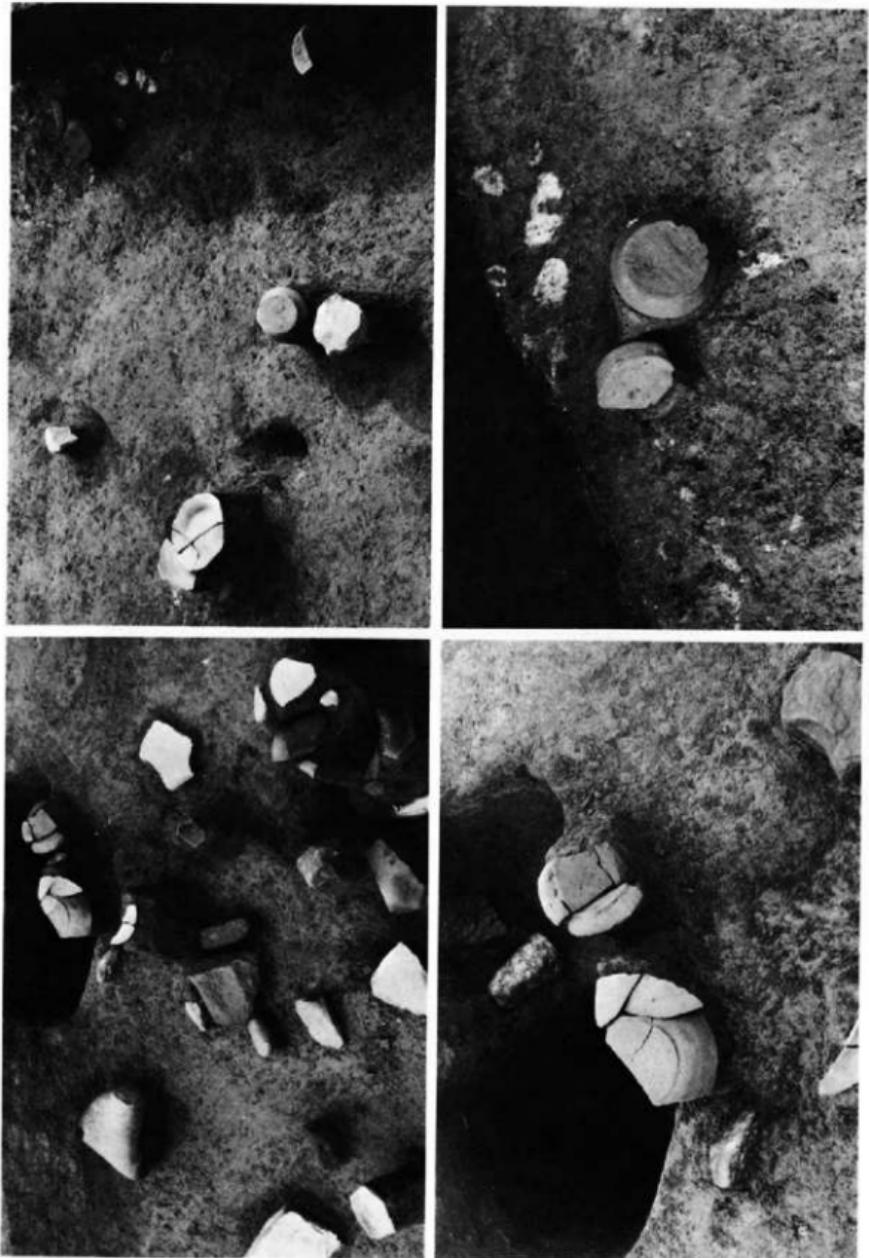
(2) 同 35



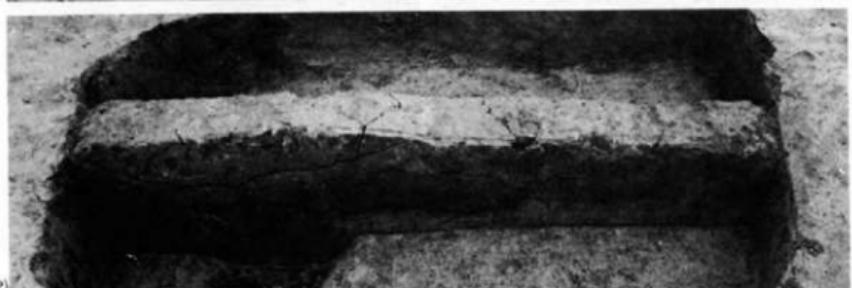
(1) 土塊 SK 09. 37



(2) 同 41



土地 SK 41 遗物出土状態



(2)



(3)

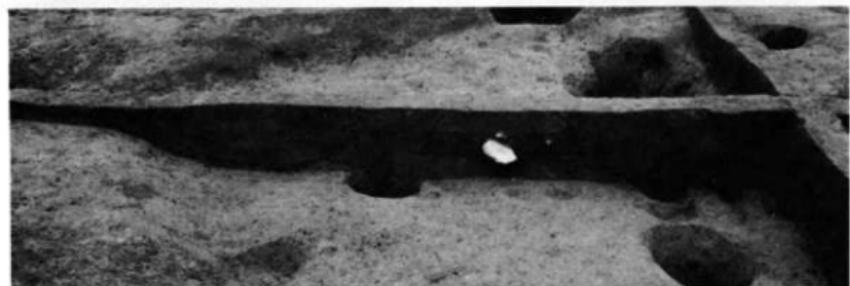
(1) 土地 SK 39 (2) 同 01 土層 (3) 同 02 土層



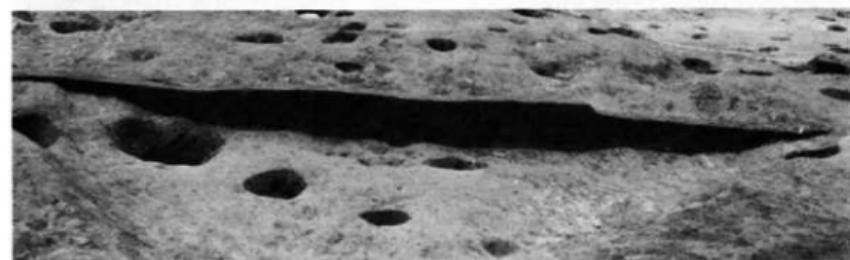
(1) 土坡 SK 03土層 (2) 同 04土層 (3) 同 05土層 (4) 同 06土層 (5) 同 07土層



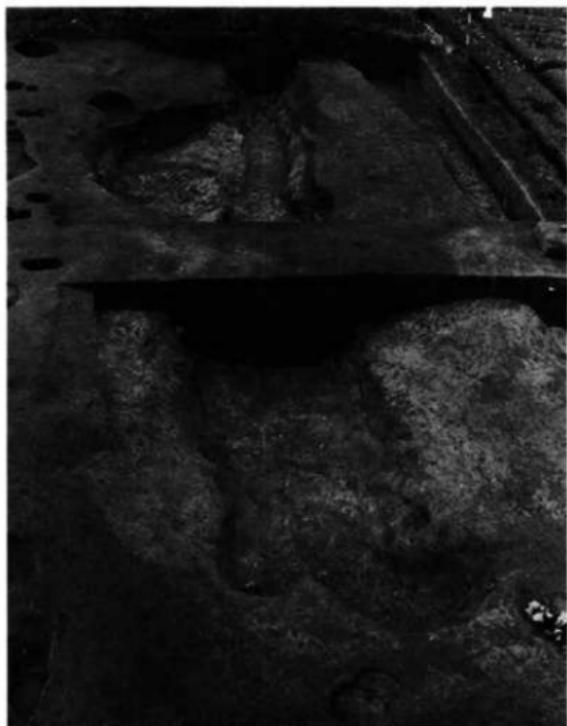
(1) 土塀 SK 33 (南壁)

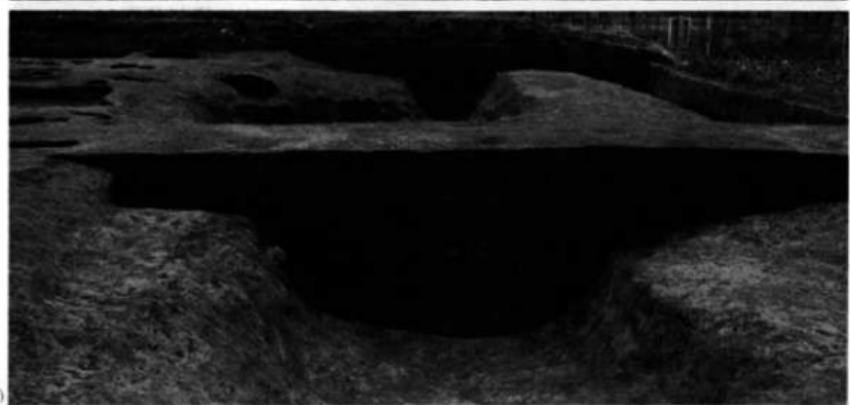


(2) 土塀 SK 41南北土層 (東から)



(3) 同 東西土層 (南から)





(1)溝 SD 01 西壁土層 (2) 同 濡りの土層 (東より)
(3) 同 中央部の土層 (東より)



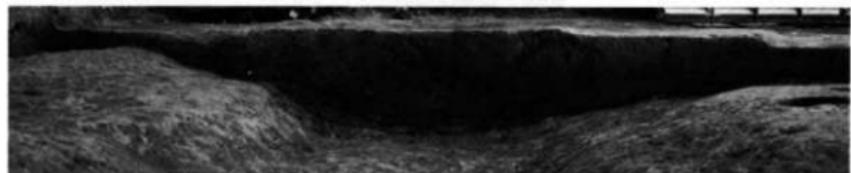
(1)溝 SD 02南部分
(縮り SX 01, 02)



(2) 同 (縮り SX 01)



(1)溝 SD 02東部分



(2) 同 東部分土層（北から）



(3) 同 西端



(1) 溝 SD 02 (溜り SX 02)



(2) 同 (溜り SX 03)



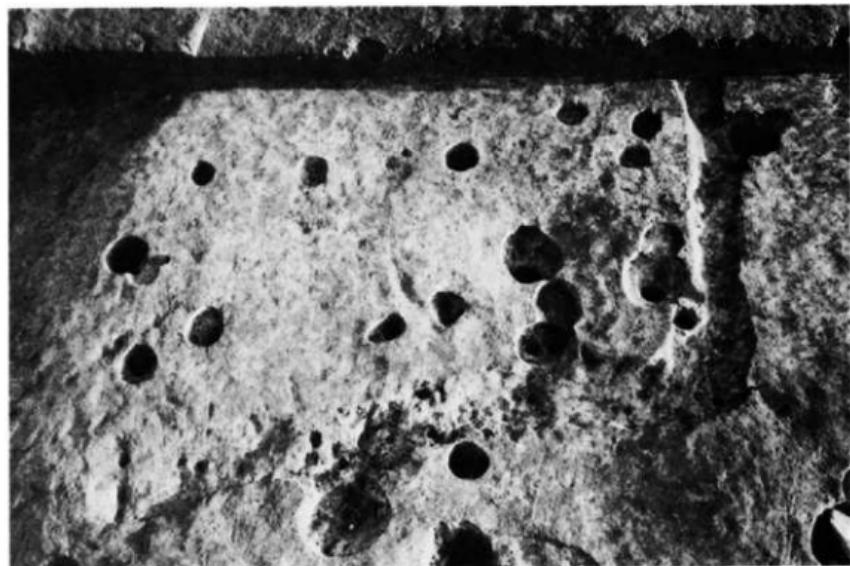
(1)溝 SD 02 西端遺物出土状態
(2) 同 溝り SX 02 遺物出土状態



(3) 同 SX 02 遺物出土状態
(4) 同 遺物出土状態



(1)溝 SD 03



(2) 同 04



(1) 脱落部 SD (6 北東隅部



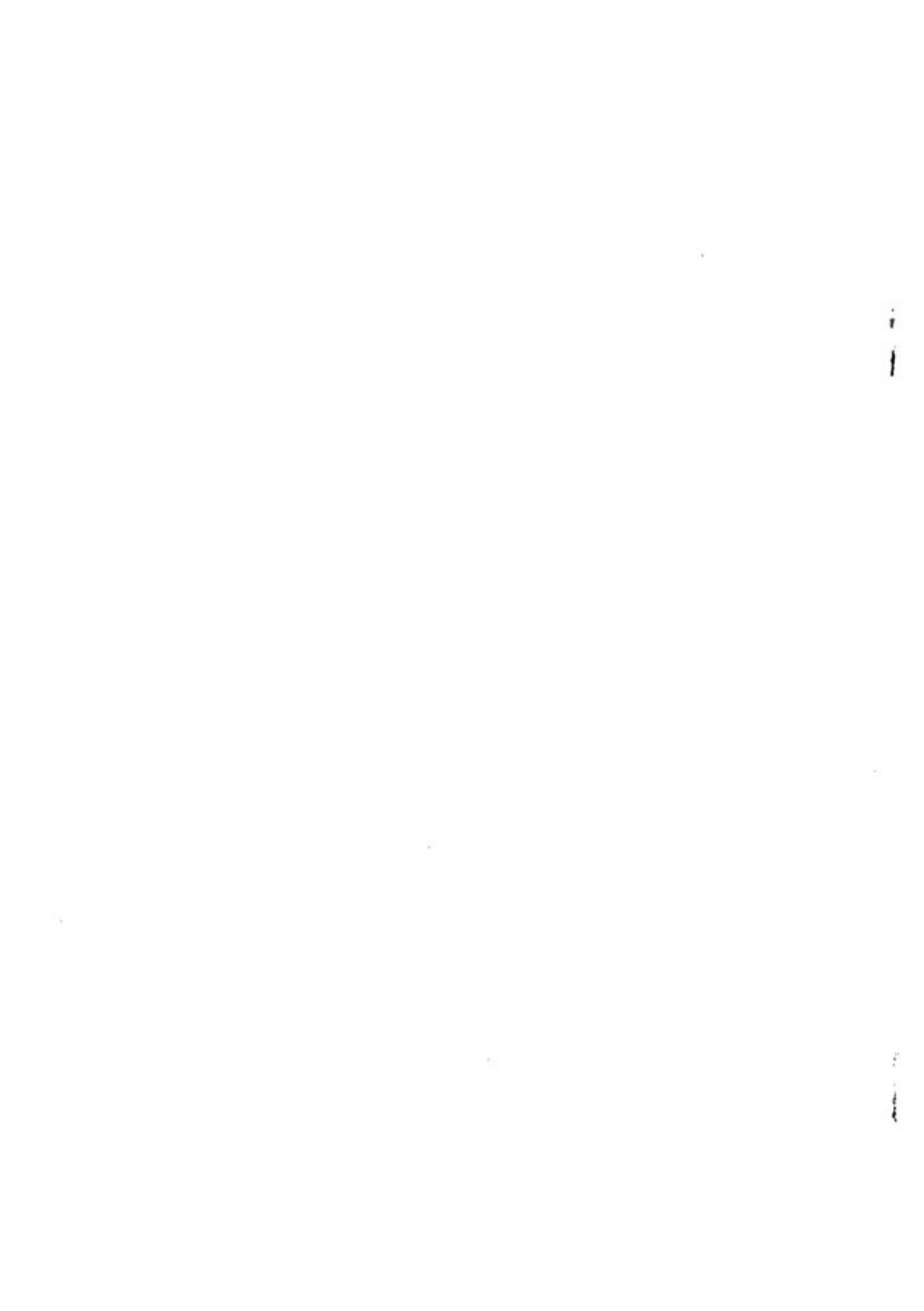
(2) 同 東辺部



(1) 第60次調査地点



(2) 同 SD 01と段落ちSD 05



有田・小田部 第3集
—原西保育所の調査—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集

1982(昭和57)年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-7-23

印刷 样文社印刷株式会社

